

# 調査情報

2013年10月号 No.40

筑波総研株式会社

1. 産業レポート  
「同時多発型・笠間モデル」  
－笠間市の先進的で多様な地域活性化への取組み－
2. 産業レポート  
「ギャラリーロード」で見られる革新的な「まちづくり」の取組み  
－笠間焼産地における「産地革新」との係わり－
3. インタビュー  
「まちづくり」・「地域活性化」についての基本的な考え方  
茨城県笠間市長 山口伸樹氏

## 【産業レポート】

## 「同時多発型・笠間モデル」

## —笠間市の先進的で多様な地域活性化への取組み—

熊坂 敏彦

(筑波総研 主席研究員)

## 目次

はじめに	1
笠間市の概要と地域活性化政策	1
農業：「ブランド化」・「6次産業化」・「都市農村交流」	2
商工業：2つの元気な商店街の取組み	3
観光：「地域密着型ニューツーリズム」	3
市民・文化活動など	5
むすび	6

## ■はじめに

茨城県は「地域ブランド力」が全国最下位であるが（日経リサーチ「地域ブランド力調査」2012年）、そうした中で茨城県県央地域にある笠間市は、「ブランド力」向上をはじめとした様々な「地域活性化策」を同時に立上げ、地域が一体となってそれに取組んでおり、注目される。それらは、農業分野、商工業分野、観光分野、市民・文化活動分野等多岐にわたり、それぞれが先進的な取組みであって、かつ、それらが相互に連鎖している。まさに、「同時多発型・笠間モデル」と呼ぶにふさわしい内容を持っている（末図参照）。そこで、本稿では、笠間市のそうした先進的で多様な地域活性化の取組みの一端を紹介したい。

なお、本稿は、一般財団法人 日本経済研究所の「日経研月報」第423号（平成25年9月）に寄稿した原稿に一部加筆修正を行ったものであり、同研究所より本誌への転載をご了承いただいたものである。まずは、厚く御礼申し上げたい。



(出所)笠間市観光協会

## ■笠間市の概要と地域活性化政策

笠間市は、人口約7.8万人の豊かな自然と歴史・文化資産に恵まれた地域である。農産物としては粟、菊、米等の産地であり、地場産業として笠間焼、稲田の御影石、日本最古の酒蔵を擁する酒造業等が有名である。また、笠間稲荷神社や笠間芸術の森公園等に年間347万人が訪れる観光都市でもある。

笠間市長の山口伸樹氏に、笠間市の「地域活性化策」を伺った。「笠間市は、『住みよいまち 訪れてよいまち 笠間』—みんなで創る 文化交流都市—の実現を目指している。2012年度からは『健康づくり』・『防災力向上』・『地域の活性化』の3つの重点施策を掲げている。『地域の活性化』としては、東日本大震災から2年経って、まちの復旧復興に目処が立ったので、これからは人口減少社会に対応した『コンパクトなまちづくり』をめざしたい。ハード面では、『駅周辺整備活性化プラン』により、公共用地を使った地域コミュニティ施設整備を行い、商業・観光振興にもつなげたい。また、都市間競争が激化する中で、笠間をどうアピールし、売り込むかが重要だが、笠間にしかないものや笠間発祥のものをPRすることで地域活性化につないでゆきたい。地域活性化は、行政が主体的に動くのではなく、地元の市民や商店街等が意欲を持って取組まないと成功



山口市長と笠間観光特別大使笠間のいなぎ

しない。行政は、きっかけづくりやお手伝いをするところであって、主体はあくまで市民だと考えている。山口市長は、このように述べられた。

山口市長が言われるように、笠間市で見られる先進的な地域活性化の取組みは、市がきっかけづくりを行ったものも多いが、総じて、「民主導」ないしは「官民連携」の下で進められているものが多い。以下、こうしたポリシーの下で進められている笠間市の取組み事例を概観しよう。

## ■農業：「ブランド化」・「6次産業化」・「都市農村交流」

### (1) 農産物の「ブランド化」

茨城県は、全国第2位の農業県であり、笠間市は、小菊、米、野菜、梅、畜産、栗など多様な農産物の産地である。このうち、栗は全国屈指の産地であるが、「ブランド力」が低く長野県に移出している現状である。そこで、山口市長の指示により、笠間市は「栗のブランド化」に取組んできた。第1は、栗の品種の特徴に合った商品作りを行い、品質を統一し、品種別の出荷を進めている。第2は、市内の栗生産者と栗需要者を一体化して産地振興を図るために「笠間の栗グレードアップ会議」を創設し、生産振興、消費拡大、産地PR事業等を推進している。第3は、「新栗まつり」という栗のイベントを開催し、栗生産農家、菓子業者、陶芸作家等が一体となって消費者との交流を図っている。このように、「日本一の栗産地」を目指して、栗を中心とした「農商工連携」が推進されている。

さらに、栗だけではなく笠間の農産物全体の「ブランド力」を高めるために、2010年から「かさまの粹(すい)」プロジェクトも始まった。これは、笠間の農産物や加工品の優れたものを市が認証し、「かさまの粹」ブランドで全国的に売り出してゆこうというものである。同時に、「笠間市農産物ブランド化協議会」を設立し、ブランド認証農産物の創出、認証、販路開拓、PR等を行っている。

### (2) 「6次産業化」：「アグリビジネスネットワーク協議会」

そのような農業振興への「官民連携」の取組みの土壌の上に、地域内で「6次産業化」を進めようという取組みが始まった。農畜産物の生産から加工・製造、流通、販売を一手に担い、地域農業・産業の活性化を図ろうとするもので、2013年7月、「アグリビジネスネットワーク協議会」が設立された。栗、イチゴ、米、野菜等を栽培する農業者に加えて食品の加工・卸売業者、洋菓子店、

料理店等42の団体・個人が参加している。事務局は当面、市の農政課に置くが、将来は自主組織化を図る予定だ。当面の活動内容は、講演



笠間アグリビジネスネットワーク協議会

会、研修会、情報交換会等であるが、本年11月には、それぞれの商品を持ち寄って展示会・見本市を行い、そこでマッチングや商品化のきっかけづくりを行いたい考えであり、今後の成果が期待される。

### (3) 「都市農村交流」：「笠間クラインガルテン」

笠間市は、2002年に、都市住民との交流による地域の活性化とグリーンツーリズム推進による農業振興を主目的とした事業として、関東初の本格的な滞在型市民農園「笠間クラインガルテン」をオープンさせた。市内本戸地区の丘陵地約4haに総事業費約8億円を投じてつくられた。施設内容は、①宿泊施設付き市民農園（全50区画、1区画300㎡、利用料金年間40万円）、②日帰り市民農園（50区画、1区画30㎡、利用料金年間1万円）、③クラブハウス、④ゲストハウス、⑤農産物直売所、⑥レストラン等から構成される。利用者の平均年齢は、62.8歳とシニアクラスで、県別に利用者構成をみると、東京29%、茨城23%、埼玉18%、神奈川14%、千葉14%となっている。最近では、ガルテナーと地域住民との交流が進み、竹林2反の再生事業（間伐、竹炭製造等）、夕涼み会等のイベントも行われている。さらに、この12年間で、5年満期となった入居者のうち15組が笠間に居住することになったという。

### (4) 「地域おこし協力隊」

笠間市は、2013年度から、総務省事業である「地域おこし協力隊」の活用を開始した。茨城県内では常陸太田市（2011年度開始、隊員数5名）に次ぐ早い取組みである。これは、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図り、都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化、地域活性化に貢献させようというものである。移



JOIN木村さん(左から2番目)と隊員の皆さん



住・交流推進機構（JOIN）の木村朋世参事（茨城県職員）によれば、2012年度の隊員数は617名、実施自治体数は207（3府県・204市町村）に及び、従来の任期終了後の隊員の進路は就農45%、就業42%、起業7%等となっており、約7割が「定住」に至っているという。

笠間市では、本年4月より、募集により委嘱した協力隊員3名を配置した。女性2名、男性1名の隊員は首都圏から移住し、笠間焼や農業等をはじめ地域や産業の活性化に向けて新たな活動をスタートさせた。笠間市まちづくり推進課の菅井敏幸氏は、「今後も継続して募集を予定しているが、笠間に住み、焼物や農業に関連した仕事に就きながら地域活性化に貢献し、最終的には定住していただきたい」と、希望を語られた。

## ■商工業：2つの元気な商店街の取り組み

### （1）ギャラリーロード商店会の「商工連携」

笠間市内には2つの元気な商店街がある。

1つは、「ギャラリーロード商店会」である。同商店会は、県立陶芸美術館、県窯業指導所、笠間工芸の丘等からなる「笠間芸術の森公園」



山口市長とギャラリーロード商店会のメンバー

に沿って点在する陶芸ギャラリー、おしゃれな飲食店、人気の高い豆腐屋さん等24店舗で構成される。2000年以降にできた新しいこの商店会の特徴は、若手経営者が多いこと、メンバーのまとまりが良いこと、笠間以外の出身者「よそ者」が多いが「笠間大好き人間」の集まりであること等である。しかも、笠間の地場産業である笠間焼やその作家・窯元との係わりが深い。

同商店会は、本年7月3日に行われた茨城県の「商店街活性化コンペ事業」で最優秀賞を獲得した。コンペでは、①笠間の知名度をあげる「全国の若手陶芸家集団」の企画展を商店会全体で行う（9月）という「笠間焼・交流推進プロジェクト」、②2008年から行ってきた地元幼稚園児と保護者が笠間の粘土でひな人形を作る「親子陶びな展」（1～2月）、の2点がアピールされた。

笠間焼産地は、栃木県の益子焼産地と並んで関東の二大焼きもの産地であるが、笠間焼は益子焼に比べて知名度が低く、販売力が弱いと言われてきた。そこで、ギャラリーと陶芸家が連携し、共同展示会や共同企画展を行って若手陶芸作家の売込みと発表の場をつくり、知名度も高めようと取り組み始めた。本年9月にギャ

ラリーロードで開催される「陶ISM in KASAMA」というイベントもそのひとつである。また、「親子陶びな展」は、地域の人と商店会が交流を図り、商店街へ誘客するイベントとして始めたものである。しかし、その志は高く、子供たちが粘土で親子雛をつくるという原体験・文化体験が将来陶芸作家を生むきっかけになることを期待した「笠間陶芸家エリート構想」にまで発展させている。

このような商店会の熱い想いと拡がりのある取り組みを評価して、市も同商店会の「歩道グレードアップ事業」等で支援予定である。

### （2）笠間稲荷門前通りの市民参加型活性化：「かさまち考」

いまひとつの元気な商店街は、「笠間稲荷門前通り商店街」である。同商店街は、日本三大稲荷の笠間稲荷神社の門前通りの古くからの商店街で、土産物屋や飲食店や酒蔵等、30店で構成される。同商店会も上記コンペで入賞経験がある。この商店街の活性化と通りの整備については、2012年4月に「笠間稲荷門前通り整備推進協議会」が設立された。稲荷神社、商工会、地元住民、地元業者が主体となり、整備方針案や整備事業内容を協議しようというものである。そして、そのために、市民参加による勉強会「かさまち考（笠間のまちと通りのこれからをみんなで考える会）」が組織され、2012年度は11回開催された。通りの整備について、ワークショップ形式で住民が主体となって協議がなされた。それを運営する「かさまち考委員会」は3つの商店会と市民から構成され、16回開かれた。そうした場で協議検討されたことが決定されて、本年3月に、笠間市に対して通りの「整備方針」として報告・提案された。主たる整備方針は、歩道幅の拡幅、地場産材の御影石を活用した車道、車道と歩道の段差の解消（イベントや歩行者天国への配慮）、ポケットパークのリニューアルなどである。

なお、今後、この会では通りのハード面の整備に関する提案だけではなく、街並み・景観や空き店舗対策等ソフト面についても協議を行う予定とのことである。

山口市長は、上記新旧2つの商店街の元気な取り組みが刺激となって他の商店街の活性化につながることを期待されている。



笠間稲荷神社の菊まつり

## ■観光：「地域密着型ニューツーリズム」

### (1) 着地型観光商品「笠間発見伝」

笠間市は茨城県内屈指の観光都市でもあり、2012年の年間入込観光客数は、347万人で県内第3位である。また、ゴールデンウィークには笠間焼協同組合主催の「陶炎祭(ひまつり)」が笠間芸術の森公園で開催され、県内最大の47万人もの人出で賑わう。

笠間市は国の「観光立国推進基本計画」に盛り込まれた新しい観光としての「地域密着型ニューツーリズム」へ取り組みでも一歩先んじている。山口市長の発案で、2008年に旅行会社とタイアップして市が「観光推進マネージャー」を採用し、観光協会と一緒に着地型観光商品「笠間発見伝」を開発、販売している。これは、「体験型・交流型のニーズに合わせた旅行商品で、日時を限定した募集商品ではなく通年型で顧客が選んで創る旅行商品の先駆けである。笠間独自の魅力を情報発信し差別化すること、新しい魅力づくりにより年間を通じて誘客することがねらいである」(笠間市商工観光課・小沢敦氏)とのことである。

最近人気の「笠間発見伝」には、「笠間で自作の一日」(マイ箸、蕎麦打ち、笠間焼作陶体験)、「笠間で女子力アップ」(器を知り、茶道をたしなみ、菓子を楽しむ)、「窯元に弟子入り」、「心を洗う笠間の一日」(親鸞聖人ゆかりの西念寺での法話、写経等)、「稲田みかげ石アートに挑戦」等がある。また、笠間観光協会は2010年4月に旅行業登録を行い、ツアーオフィスを設置し、案内役のボランティア「ふるさと案内人」が約30人登録されている。こうして着地型旅行事業「笠間発見ツアーズ」の売上は、順調に拡大しているようだ。

笠間市と観光協会は、更なる観光振興のために周辺市町村との「広域連携」を企図している。すなわち、旅行事業の事業性をさらに高め、交流人口を増やすためには笠間のみでは限度があるので、「広域連携」によって周辺地域の魅力も併せて発信し、事業領域を拡げて行こうとするものである。そのひとつが水戸市、大洗町との連携により開発した新商品「いばらき三遊記」である。これも着地型観光商品である。さらに、笠間市では、平日の入込客を増やすために「教育旅行」(遠足や宿泊研修旅行)等の誘致をすすめている。また、本年4月18日より東京・秋葉原と笠間・益子間をつなぐ高速バス「関東やきものライナー」が運行開始した。秋葉原駅発8時20分を始発に1日往復4便運行している。本年9月からは、1往復の増便が予定されている。これを契機に、県域を栃木県益子町と共に「かさましこ観光協議会」を立上げ、同じ焼物の里として、PRの連携、旅行商品の共同開発による交流人口拡大を目指している。

### (2) 「ご当地グルメ」への挑戦：「笠間のいなり寿司いな吉会」

笠間市の有志が、2010年に、「ご当地グルメ」を活用した「まちおこし」に挑戦しようとして立ち上がり、「笠間いなり寿司いな吉会」が組織化された。全国のまちおこし組織である「まちおこしの祭典! B-1グランプリ(通称:B-1グランプリ)」は、「B級ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会(通称:愛Bリーグ)」が主催しており、全国で77団体が加盟しているが、茨城県で初めてそこに登録し、2012年5月には茨城県内唯一の正会員に昇格している。当会の会員数は、市民や支援団体を含めて約40名。その中には笠間市の商工観光振興分野で活躍されてきたまちづくり推進課の菅井敏幸氏をはじめ、市役所の職員もボランティア活動として多数参加している。そして、変わり種が特徴的な「笠間いなり寿司」を提供する飲食関係の加盟店は15店である。

今年度の事業計画は、①毎月17日「笠間いなり寿司の日」、②親子笠間いなり寿司教室、③マップ作成、④加盟店拡充、⑤おいなりサミット「笠間いなり寿司コンテスト」、⑥おいなりサミット「笠間初午いなり寿司まつり」、⑦「B-1グランプリ」出展(9月勝浦、11月豊川)、⑧「愛Bリーグ」団体との交流、⑨他市町村イベントでのPR等である。また、本年11月30日、12月1日の2日間、笠間稲荷門前通りを中心に「ご当地グルメサミットin 笠間」が開催され、県内外から様々なご当地グルメが集合するイベントも計画されている。

市も食を通じた「地域おこし」として期待し、予算措置を講じて支援している。

### (3) 「笠間ファン倶楽部」

笠間市は、2004年12月に「笠間ファン倶楽部」を創設した。茨城大学の斎藤典生先生の助言に基づくもので、笠間市観光集客のため笠間市ファンを増やし、リピーター化することにより、内外の交流を活発化させ、市の総合的な活性化を目指している。「笠間の隠れた情報を発信し、交流人(外の眼)が多く笠間人(内の眼)とふれあえる場をつくる新しい仕組み」と定義されている。事務局は、笠間市の商工観光課になっている。本年7月現在、会員数は1,629人(県内978、千葉209、東京200、埼玉81、神奈川66、栃木33、群馬12)で、東京支部(支部長・植崎茂氏)もある。会員には「笠間ファン倶楽部通信」(季刊)が送られる他、インターネットメールでも最新の観光情報が送られる。また、会員は笠間市内のファン倶楽部協力店でサービスが受けられる他、有料会員(年会費5,000円)



になると毎年笠間の特産品プレゼントが届けられる等の特典もある。

#### (4) 「恋人の聖地」

笠間市は、2010年6月に、全国で100番目の恋人の聖地「陶芸の里かさま」として認定された。茨城県内では初めてである。「恋人の聖地」は、NPO法人地域活性化支援センターが展開しているプロジェクトである。「少子化対策と地域の活性化への貢献」をテーマにし、「観光地域の広域連携」を目的に、全国の観光地域の中からプロポーズにふさわしいロマンティックなスポットを「恋人の聖地」として選定し、地域の新たな魅力づくりと情報発信を図るとともに、地域間の連携により地域活性化を目指すものである。

笠間市は、笠間芸術の森公園内にモニュメントを作成した。笠間焼協同組合、笠間工芸の丘をはじめ市内のギャラリーや販売店は、モニュメントに続く道にはめ込む陶板の取扱店となっている。恋人たちは、陶板に思い思いのデザインができるという仕掛けだ(料金1枚1,500円)。

また、市内の北山公園新池では、毎年夏に、笠間青年会議所と笠間市とが主催して、ハート形のイルミネーションを展示して公園内を神秘的な光で彩り、様々なイベントを行っている。



モニュメントと陶板の道

## ■市民・文化活動など

### (1) 「地域ポイント制度」

笠間市には、NPOや地域コミュニティ、環境、子供関連の市民活動団体が1,000団体以上ある。5年前に山口市長の発案で「地域ポイント制度」の検討を始め、昨年に市民生活部市民活動課が主管となって社会実験を実施、本年4月から「地域ポイント制度」を本格稼働させた。その目的は、協働のまちづくり推進に当たり、市民活動に対して新たな価値を付加し流通させることにより、参加機会や新たな人材を掘り起こすとともに、活動のやりがいや楽しみ等を創出し、継続的な市民活動を支援するためである。ポイントは、市や市民活動団体が主催するイベント・講座、ボランティア活動への参加・協力等に付与される。そして、ポイントは、地域商品と交換して地域活性化に貢献する、みんなのポイントを合算して市民の願いを実現する公益

事業を実施する、市民活動団体の事業を支援するために寄付をする等に利用できる。社会実験段階ではスタンプカードを利用していたが、本格実施段階ではICTを活用した非接触型ICカード「フェリカ」をベースとした「KapoCa」(写真)を発行している。将来的には、「市内の事業者とも連携してポイント交換ができるようにし、買い物をすることで地域貢献ができ、事業者もポイント発行で地域貢献になるような地域の総合カードに発展させたい」(笠間市市民活動課長・内桶克之氏)意向である。



(写真提供)笠間市

### (2) 「NPO法人グラウンドワーク笠間」

笠間市民は、シニアクラスも元気である。2012年3月に、60歳以上のシニア、年金生活者が主体となり、「社会貢献と自立」を主眼にして「NPO法人グラウンドワーク笠間」(理事長：埴茂氏)を立ち上げた。「グラウンドワーク」とは、1980年代初頭、サッチャー政権時代に英国で発祥したボランティア型市民活動組織で、1990年代に日本でも住民のボランティア活動として、静岡県三島市、滋賀県甲良市、福岡県福岡市等で地域環境改善活動が始まった。現在、一般財団法人日本グラウンドワーク協会に加入している「グラウンドワーク」は27に及んでいる。茨城県では、那珂市の「清水洞の上自然を守る会」(会長：鈴木孝雄氏)に次いで、「NPO法人グラウンドワーク笠間」が2番目である。

「NPO法人グラウンドワーク笠間」の基本目標は、①地域の未来に笑顔の種をまこう！、②シニアが“元気に自立”し輝くまちづくりを！、③片手にスコップ&片手に缶ビール、である。リーダーの埴茂氏は、笠間市出身で、70歳、民間企業の役員を務められた方だが、エネルギーに活動を推進されている。現在、メンバーは40人で、平均年齢は65歳という。主な活動内容は、①社会貢献活動(学童の通学安全サポート、自主防災組織の結成サポート、少女サッカーチーム支援等)、②農業6次産業化(耕作放棄地を借り受けて野菜作りと加工食品づくり等)、



「グランパとグランマのお店」入口にて

③まちなかカフェ「グランパとグランマのお店」(ギャラリーロードの「笠間民芸の里」内)の運営である。

この事業には、内閣府の被災地復興支援補助金が支給されている他、笠間市も市民活動課を窓口として、町おこし助成金の補助を行っている。

### (3) 「民間交番」

笠間市は、防犯連絡員、防犯ボランティアを中心に家庭、地域、学校等との連携を図り、地域ぐるみで防犯活動に取組み、安心なまちづくりを目指している。本年9月には、その一環として、市内旭町の空き店舗に「笠間市民間交番あさひ」を設置した。これは、警察官や地域住民の立ち寄り所として、防犯情報の交換の場として、地域による防犯意識向上の場として期待されている。警察OBや市民87名が「セーフティサポーター」(非常勤特別職)に委嘱され、年中無休、3名交代制で勤務する。

### (4) 「公共クラウド」:「介護健診クラウド」

笠間市は、2012年2月に「健康都市かさま宣言」を行い、「健康づくり」を重点施策に掲げているが、本年3月に、その一環として、総務省が行う「公共クラウド構築プロジェクト」と名付けられた実験に「介護健診クラウド」分野で応募し、全国6団体の一つとして選出された。このプロジェクトは、来年度以降の国の成長戦略にも位置付けられているもので、先駆的な事業である。健康分野、介護分野、災害分野、観光分野などで、市民、行政、事業所が相互に必要な情報を共有・管理できる情報基盤の構築実証を行うものである。笠間市は、3億円超の予算規模で総務省と委託契約を締結し、2013年度の事業として本件を推進中である。

### (5) 「クールシュヴェール国際音楽アカデミー in かさま」

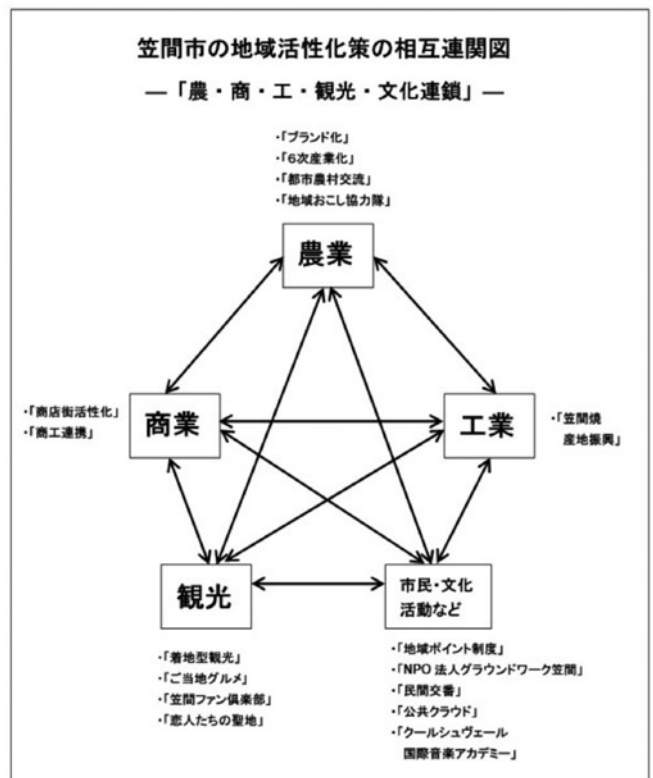
笠間市は、2005年3月から毎年3月に10日間、フランスのリゾート地クールシュヴェールで毎年夏に開催され世界各地の音楽大学から60人の教授と600人に上る受講生が参加する「クールシュヴェール夏季国際音楽アカデミー」の「日本開催版」として、「クールシュヴェール国際音楽アカデミー in かさま」を開催している。世界で活躍する若手音楽家の育成と音楽によるまちづくりをめざしている。バイオリン(30人)とピアノ(40人)の個人レッスンを開催し、日本全国からの若手音楽家育成を図るとともに、世界一流の参加講師によるコンサートや「街角コンサート」を行い、市民・県民への最高レベルの音楽に触れる機会を創出してきた。3月の10日間、笠間の街中に音楽が溢れる。

来年からは「かさま国際音楽アカデミー」と改称して続ける予定である。「文化交流都市・笠間」の名をさらに高めていただきたい。

## ■むすび

以上、見てきたように、笠間市では先進的な地域活性化策が同時多発的に展開されており、最近に至るまで切れ目なく次々に新たな取組みが行われている。しかも、末図のように、それらは相互に連鎖して良い影響を及ぼしあっている。それらは正に「同時多発型・笠間モデル」と呼ぶにふさわしい内容といえよう。さらに、そのモデルは、21世紀型の地域振興モデルとして注目される「内発型モデル」に発展する可能性を秘めている。笠間市の今後の「地域活性化」の成果が楽しみである。

(末図) 「同時多発型・笠間モデル」



### (参考文献)

- ・熊坂敏彦「『同時多発型・笠間モデル』—茨城県笠間市における先進的な地域活性化の取組み—」日本経済研究所「日経研月報」2013年9月号、第423号
- ・熊坂敏彦「茨城らしい観光振興への取組み—笠間市の地域密着型ニューツーリズム—」筑波銀行調査情報」2010年4月号No.26
- ・熊坂敏彦「関東二大陶磁器産地の特性比較—笠間焼産地と益子焼産地—」筑波銀行調査情報」2011年1月号 No.29
- ・熊坂敏彦「茨城農業の特徴と革新への取組み」筑波銀行調査情報」2011年10月号No.32
- ・熊坂敏彦「茨城・栃木における地域ブランド力向上に向けた取組み」筑波銀行調査情報」2012年1月号No.33
- ・熊坂敏彦「地方自治体における『地域ポイント制度』の新展開」筑波総研「調査情報」2013年7月号 No.39



## 【産業レポート】

# 「ギャラリーロード」で見られる革新的な「まちづくり」の取組み —笠間焼産地における「産地革新」との係わり—

熊坂 敏彦

(筑波総研 主席研究員)

## 目次

はじめに：なぜ「ギャラリーロード」か	7
1. 「ギャラリーロード」の概要と特徴	8
2. 個性的な「ギャラリー」の集積による「産地革新」への寄与	10
3. イベント「陶ISM in KASAMA」に見る新たな「産地革新」の息吹き	16
4. 「ギャラリーロード」の仕掛け人たち	19
むすび：笠間焼産地における「産地革新」の新展開の可能性	24

## ■はじめに：なぜ「ギャラリーロード」か

なぜ、「ギャラリーロード」なのか。本稿で笠間市の「ギャラリーロード」を取り上げる理由は、以下の通りである。

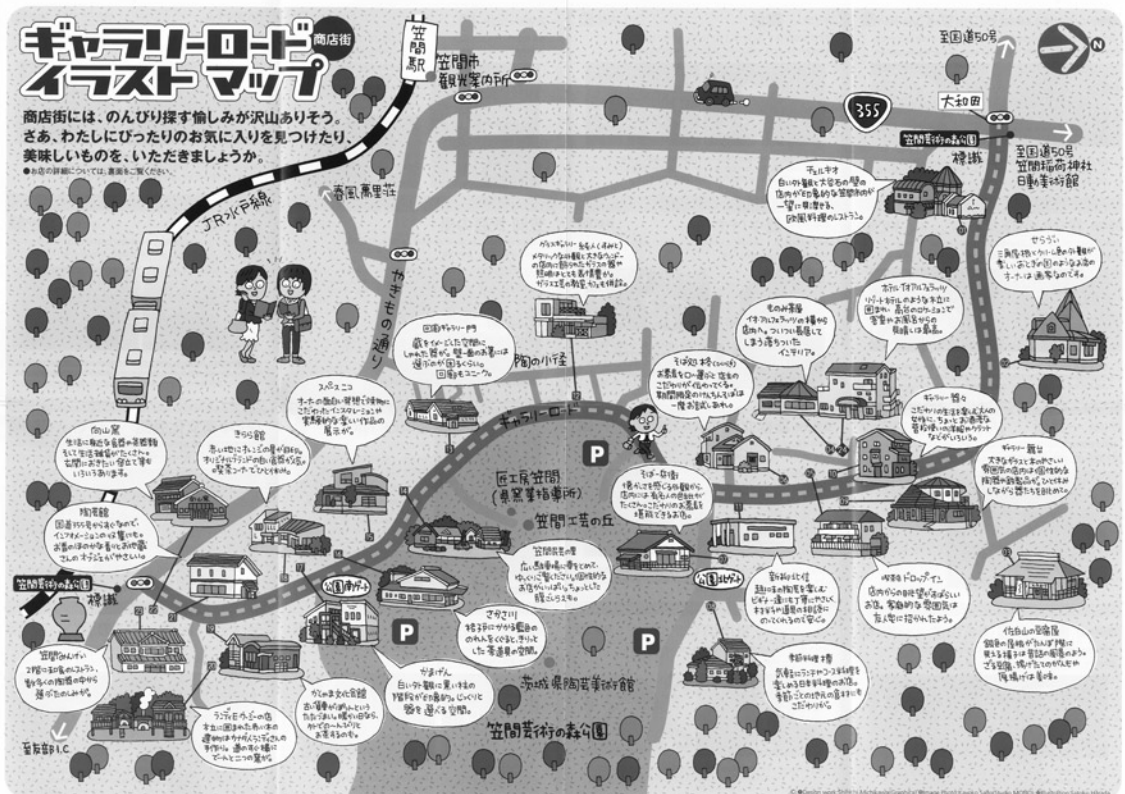
第1に、笠間市で展開されている「同時多発型・笠間モデル」と呼ぶにふさわしい先進的で多様な「地域活性化」の具体的な取組事例が「ギャラリーロード」で数多くみられることである（拙稿「同時多発型・笠間モデル」参照）。（図1）ギャラリーロードマップ

第2は、「ギャラリーロード商店会」の「まちづくり」の取組みは、地場産業・笠間焼の振興と深くかかわっており、「商工連携」等による「産地革新」の事例として評価できることである。「ギャラリーロード商店会」は、2013年7月に茨城県の「商店街活性化コンペ事業」で最優秀賞を獲得したが、そこで

評価されたイベントの企画・内容も、単に一商店会の「商店街づくり」の域を超えて、「産地革新」や地域全体の活性化に発展しうる要素を持っている。

第3は、「ギャラリーロード」及び「ギャラリーロード商店会」には、「産地革新」の担い手として注目すべき、個性的で革新的な経営者が多いことである。

そこで、本稿は、以上3つの観点から「ギャラリーロード」を取り上げ、この通りに係わりを持つ経営者や関係者へのヒヤリングとイベント参加等によって得られ



(資料) ギャラリーロード商店会



た情報等をもとに、「ギャラリーロード」で見られる革新的な取組みや可能性について紹介したい。それが、他地域の「まちづくり」、「地場産業産地の革新」、「地域活性化」等の参考になれば幸いである。



「きらら館」付近のギャラリーロードの風景

## ■ 1. 「ギャラリーロード」の概要と特徴

### (1) 「ギャラリーロード」の概要

「ギャラリーロード」は、「笠間芸術の森公園」に沿うように走る森の道「個性あふれるギャラリーや飲食店、ホテルなどが並ぶ笠間の見所」である。

茨城県笠間市笠間にある全長約2kmのこの道は、「笠間芸術の森公園」の建設に合わせて造られた新しい道路で、1997年の全線開通後16年しかたっていない。北関東道の友部I.C.を出て左折して国道355号を「笠間芸術の森公園」方面に走り、「向山窯」が見えたら信号を右折したところを始点(終点)に、「笠間芸術の森公園」を右手に見ながら丘を登って下り、再び国道355号と交わる大和田交差点を終点(始点)とする区間である(図1)。

そして、この「ギャラリーロード」には、個性あふれるギャラリー、おしゃれなカフェ、レストラン、ホテルなど、24のお店が点在している(図1)。そうしたお店もまた新しく、進出して10～15年程度のお店が多い。そのうち半数の12店が陶磁器を中心とした「ギャラリー」である。「ギャラリー」以外に、カフェやレ

ストランが5店、蕎麦、寿司などの和食店が4店、豆腐屋さん1店、ホテル1店、土産物店が1店という構成であるが、そうした「ギャラリー」以外のお店でも笠間焼が展示されていたり、陶芸作家の個展を開くこともあって、通り全体が「やきもの」と深いかわりがあり、「やきものの町・笠間」の「ギャラリーロード」と呼ぶにふさわしい雰囲気を持っている。

ところで、「ギャラリーロード」の中央部に隣接して広がる広大な「笠間芸術の森公園」(総面積55ha)は、茨城県と笠間市により建設されたが(1992年)、その中に①茨城県工業技術センター窯業指導所「匠工房・笠間」(1995年、試験研究機関・笠間焼後継者育成事業)、②「笠間工芸の丘」(1998年、第三セクターによる展示・販売施設)、③「茨城県陶芸美術館」(2000年、東日本初の陶芸専門美術館)の3つの「公的支援施設」が配置されている。また、この公園の集客力は大きく、毎年ゴールデンウィークにここで開催される「陶炎祭(ひまつり)」に47万人、「笠間工芸の丘」に年間22万人、「茨城県陶芸美術館」に年間8万人もの観光客が訪れる。最近20年間の笠間焼産地は、これらの「公的支援施設」(ハード)とここを中心に展開された様々なイベント、教育研修、展示販売など(ソフト)によって急成長し、「作家中心の多様で自由な脱伝統産地」からさらに「芸術文化産地」へと変貌を遂げてきたようだ(拙稿「地場産業産地の競争力とイノベーション—笠間焼産地の事例を中心に—」及び「関東二大陶磁器産地の特性比較—笠間焼産地と益子焼産地—」参照)。

そして、そうした「産地革新」が奏功して、笠間焼産地は、全国の陶磁器地場産業産地が衰退していく中で、相対的に「元気な産地」として注目されている。2012年の笠間焼産地の規模は、企業数270社、従業員数450人、出荷額10億円で、従業員数は増勢にあり、企業数や出荷額も他産地に比べれば落ち込み方は小さい(笠間焼協同組合・深町明事務局長よりヒヤリング)。このように、「笠間芸術の森公園」は、笠間焼産地の「中心地」であるばかりか、最近における「産地革新」の舞台の「中心」でもあるといえよう。



茨城県陶芸美術館



窯業指導所「匠工房・笠間」



「笠間工芸の丘」

本稿でテーマとする「ギャラリーロード」は、以上のような笠間焼産地の「中心部」に隣接し、「地の利」に恵まれて成長してきたが、他方で、「ギャラリーロード」の経営者たちも、本業やイベントなどを通じて産地の「芸術文化化」に貢献し、笠間焼産地の「産地革新」に寄与してきたようである。

## (2) 「ギャラリーロード商店会」の特徴

「ギャラリーロード商店会」の特徴について、関係者からヒヤリングした結果を整理すると以下のようにまとめることができる。

第1は、「新しい」ことである。「ギャラリーロード商店会」は、「笠間芸術の森公園」の建設時に新設された「道」に進出したお店が、今から10年前に「商店会」を結成した新しい「商店会」である。笠間市内に10団体ある「商店会」の中でも「新興商店会」の一つである。「新興商店会」として古くからのしがらみがない分だけ新しいことにチャレンジでき、バイタリティがあると見られている。

第2は、「若い経営者」が中心で、創業者も多く、前向きでやる気にあふれた人が多いことである。当商店会の役員は、2年交代制をとっているが、現在の商店会のリーダーは、岡部雄一会長（41歳）を中心に金澤大介氏（42歳）、河原井信之氏（43歳）の同世代の若手3人である。彼らと彼らを支える役員たちが推進する当商店会の最近の取組みは、「パワフルでスピーディである」（笠間市観光協会会長・向山窯代表取締役・増渕浩二氏談）と評価されている。

第3は、「個性」にあふれたお店が集積していることである。ギャラリー、窯元、カフェ、レストラン、ホテル、蕎麦屋、寿司屋、和食店、民芸品店、手作り豆腐店など、バラエティに富んだお店が並び、かつ、それぞれが「個性的」であり、全体として「多様性」があることがこの通りの「魅力」になっている。

第4は、経営者に「よそ者」が多いことである。25店の経営者のうち、笠間市内出身者、地元出身者はごく少数である。県内他地域や県外出身者が多数を占める。しかし、全員、「笠間大好き人間」の集まりである。「よそ者」の目で町を客観視しながら、「まちづくり」に熱い思いをぶつけ合っている。

第5は、メンバー同士の「仲が良く、まとまりがある」ことである。同業種であるギャラリー同士が顧客紹介や相互送客などを行っているほか、豆腐店と和食店、ギャラリーと飲食店など異業種間でも食材の供給や顧客紹介など「ヨコの連携」が多くみられる。

第6は、特に申し合わせをしていないのに、通り全体の雰囲気「おしゃれ」で、「モダン」で、「センス

が良い」、「芸術の町としての雰囲気がある」等、町並みや通りの雰囲気に「統一性」が感じられる。しかも、それぞれの個店がそれぞれの特徴や得意分野を強く打ち出しながら同業他店と競合しない方向をめざしているようで、通り内の「共存共栄」も図られている。

第7は、外部との「連携」が上手で、広い「ネットワーク」を構築していることである。特に、隣接している茨城県工業技術センター窯業指導所とは緊密な関係を作っている。工芸技術部門部門長の佐藤茂氏によれば、「窯業指導所の業務は、ものづくり・技術支援だけではなくデザイン、販売拡大支援もあります。ギャラリーロード商店会のメンバーは、そうした機能も活用され、至近距離にある地の利を生かしてノンアポで相談に来るような『顔の見える関係』を作られています。」と言われている。

第8は、「女性」の経営者が頑張っており、通りのお店の固定客にも「女性」が多いことである。12店のギャラリーオーナーの中で見ても、実に6店が女性オーナーである。趣味で陶芸を始めて、一代で笠間に窯を立上げ、「主婦（女性）目線」でギャラリー・販売店事業も成功させた「きらら館」の岡部登志子会長をはじめ、商店会の発展に尽力され、香を中心にしたユニークなギャラリーを運営される「ギャラリー陶芸館」の宇賀恵子氏、裏千家の師範で茶陶中心のギャラリーを運営される「さかさ川」の永地宗栄氏、自分の趣味に徹した品揃えのセレクトショップ「SPACE NICO」の大嶋順子氏、陶器から婦人服やアクセサリなどを多様に揃える「器々」の高野光子氏、国際線の客室乗務員時代に笠間でギャラリーを始め、現在商店会の副会長として活躍される「舞台」の山田眞弓氏、女流画家協会の会員でおしゃれなカフェギャラリー「せらぐい」を運営される川俣洋子氏、ユニークなカフェギャラリー「かしゃま文化会館」の「車掌」をつとめる井上あや氏等である。

こうしてみると、「経営革新」や「産地革新」など



笠間市長と懇談するギャラリーロード商店会メンバー



を含めた「革新(イノベーション)」の重要な推進者として、「若者」「よそ者」「ばか者」「女性」があげられることが多いが、ここ「ギャラリーロード商店会」の特性の中にもそのような推進者を数多く発見することができる。

## ■ 2. 個性的な「ギャラリー」の集積による「産地革新」への寄与

### (1) 「ギャラリーロード」の「ギャラリー」の特徴

「ギャラリー」とは、「美術作品を陳列・展示したり販売したりする施設や組織」(ウィキペディア)を意味する。笠間の「ギャラリーロード」には、窯元や作家のお店、小売専門の陶磁器店(やきものショップ)とは違って、ギャラリーオーナー(店主)の意向に沿って、陶芸作家の企画展や個展を頻繁に開催し、単なる販売店の域を超えて作家の展示・販売の場になっている、そうした「ギャラリー」が10数店も立地している。

自らもギャラリーオーナーである「ギャラリー曜耀」の金澤大介氏によれば、「全国のやきもの産地で、一つの通りに『ギャラリー』がこれだけの規模で並んでいるのは笠間の『ギャラリーロード』が唯一である。『ギャラリーロード』の『ギャラリー』は、ギャラリーオーナーを目指したものが中心であり、個性的な『ギャラリー』が多い。益子や常滑や備前などでやきもの通りに並んだお店は、窯元や窯元出身者が販売のためのお店を出しているものが中心で、純粋にギャラリーオーナーを目指している『ギャラリー』は少ない。」と語られている。

茨城県陶芸美術館の首席学芸主事の柳田高志氏は、「『ギャラリーロード』には個性的な『ギャラリー』が多く、販売だけでなく、作家の作品展示も行っており、産地の活性化にも貢献している。特に、若手作家の展示の場としての機能は評価される。」とコメントされている。

茨城県工業技術センター窯業指導所の久野亘央氏は、「笠間のギャラリーロードの『ギャラリー』は、それぞれに個性があって、この道を辿るのが楽しい。それぞれのお店が、顧客ターゲットを決めて品揃えを行っており、それぞれの商売の仕方、仕掛け方が違っている。益子は、城内坂通りにやきもののお店が集中しているが、笠間とは違っている。益子の城内坂通りは、表通りが販売店でその裏に工房があるという構造が多く、窯元による『製販一体型』のお店が中心になっているが、笠間は作家の工房とギャラリーや販売店の立地は離れており、『製販分離型』といえる。また、そして、笠間の『ギャラリー』では、自由な仕掛けが見られ

る。」と、「ギャラリーロード」のギャラリー機能を評価されている。

笠間市役所まちづくり推進課の菅井敏幸氏は、長年にわたり商工観光行政に携わっておられ、このギャラリーロード商店会の立上げにも係わられたが、「ギャラリーロード」の特徴を次のように述べられた。「1つは、個店のレベルが高いこと。それぞれの店のコンセプト、ターゲットがはっきりしていて、品揃えも作家ものが中心で、センスが良い。2つは、ギャラリーごとの個性が強いこと。女性中心の店、若者中心の店、アートや骨董品の店、接客やおもてなしの良さが売りの店など、個性が強いお店が多い。」と語られている。

以上のような関係識者のお話を総合し、「ギャラリーロード」の主な「ギャラリー」13店からのヒヤリング等をまとめた一覧表(表1)から読み取れる特徴は、以下の通りである。総じて、個性的な「ギャラリー」の集積が、「産地の活性化」、「芸術文化産地化」、すなわち「産地革新」に寄与していると見ることができそうである。

第1は、個性的で、多様な「ギャラリー」が集積している。すべての「ギャラリー」で頻度は違っても作家の作品を展示する「企画展」や「個展」を開催している。それらは、「作家中心の多様で自由な脱伝統産地」という笠間焼産地の特徴が、流通・商業面でも表れていると見られる。そして、この10数年間、「ギャラリーロード」に「ギャラリー」が集積し、作家に「展示・発表の場」を与えたり、「目利き」の役割を果たしたり、観光客の「集客力」を高めたりできるようになったことが、笠間焼産地をさらに「芸術文化産地」へ進化させる一要因になっているように思われる。

第2は、「ギャラリー」の大半は「製販分離型」で「流通機能(卸小売機能)中心」の企業であり、製造も行っている「ギャラリー」は、窯元系が1社、作家系が2社に過ぎない。最近における「ギャラリーロード」の成長は、従来、笠間焼産地の弱点と言われた「販売力・ブランド力の弱さ」を克服するきっかけとなる可能性があるだろう。

第3は、主な仕入れ先は、大半の「ギャラリー」が「笠間中心」であり、「笠間・益子中心」という店が2店、「全国」という店が2店に過ぎない。「ギャラリーロード」が笠間焼作家や産地と共存してきたことが明白である。しかし、今後、笠間の枠を超えたネットワークの高まりから、仕入先の「広域化」が進展し、同時に販売先の「広域化」も拡大しそうである。

第4は、主な販売先は、ほぼ全社が「固定客中心」であり、約半数のギャラリーが「県外客中心」となっている。個店ごとのレベルの高さ、マーケットセグメ



(表1) ギャラリーロードの主なギャラリー一覧

店名	特徴	製造	卸売	小売	主な仕入先	主な販売先
向山窯 プラザ店	窯元の直営店・アンテナショップ。業務用食器中心。若手作家の企画展。	○	○	○	自社中心職人13人。	全国。卸6割・小売り4割。
笠間みんげい	笠間焼の食器と食事処（150名収容）。	—	—	○	笠間中心。	固定客・団体客中心。
ギャラリー陶芸館	笠間の特定作家中心。香、線香、香炉等に移行中。	—	—	○	笠間中心。線香は淡路島。	固定客中心。県外客多し。
きらら館	笠間・益子の他全国500人の作家の作品。2週間毎個展。喫茶コーナー。	○	○	○	笠間・益子中心。	固定客中心。県外客多し。
かまげん	近在の作家・窯元の焼き物中心。個展年4～5回。	—	○	○	笠間中心50人。	関東近郊の顧客。
さかさ川	茶道具中心の陶芸。茶室2室で裏千家茶道教室開催。個展年1回。	—	○	○	笠間中心50人。	固定客中心。県内外の顧客。
SPACE NICO	オーナー好みの面白い可愛い・たのしい陶器とガラスのセレクトショップ。	○	○	○	笠間・益子中心20人。	固定客中心。9割が女性客。
ギャラリー曜輝	物故作家や美樹幹に並ぶ作品の取扱い事業と全国若手作家の育成。	—	○	○	市場・作家・顧客。	百貨店・美術館・個人客。
回廊ギャラリー門	中庭を囲む回廊形式の建物。陶器・箸・漆器・家具など。2週間毎個展。	—	—	○	笠間中心80人。	固定客中心。県外・女性客多し
SUMITO	質の高い工芸ガラスのセレクトショップ。毎月個展開催。	—	—	○	全国のガラス作家80人。	固定客中心。県外客多し。
ギャラリー器々(キキ)	普段使いの陶芸品・ガラス・婦人服・アクセサリーなど。	—	—	○	笠間中心。	県内客中心。
ギャラリー舞台	普段使いの器・食器中心。観光情報発信。個展・企画展随時。	—	○	○	笠間中心40人。	固定客中心。県内外の顧客。
カフェギャラリーせらうい	笠間焼陶器と絵画。ギャラリーを兼ね備えたカフェ。個展年4～5回。	—	—	○	笠間中心。	固定客中心。県外客多し。

(資料) ギャラリーロード商店会「ギャラリーロードショップナビ」、「笠間やきもの散歩道」、ヒヤリング等により作成

ンテーションの明確さなどにより首都圏等の固定客をしっかりと掴んでいる。また、団体客や観光客が最初に訪れ、土産物として購入することが多い、第三セクターの「笠間工芸の丘」（年間22万人）との競合を問題視する向きもあるが、「ギャラリー」の顧客は「固定客中心」とすれば、両者の「棲み分け」が可能であり「共存共栄」が可能であって、「笠間工芸の丘」に「インフォメーションセンター」の役割を果たしてもらえばより効果的と思われる。

## (2) 「ギャラリー」の個性を探る

それでは、「ギャラリーロード」に集積した「ギャラリー」の個性をもう少し掘り下げて見てみよう。

### ① 「向山窯・笠間焼プラザ」

「向山窯・笠間焼プラザ」は、国道355沿い、「笠間芸術の森公園」入口に位置し、「ギャラリーロード」の南端にある。1960年代に作家誘致のために建設され、芸術家達が創作拠点としている「芸術村」に本店を置く窯元・「向山窯」の「アンテナショップ」である。笠間には、現在、8つの窯元があるが、「向山窯」はそのひとつであり、笠間焼産地最大の窯元である。笠間市観光協会会長を務められる増渕浩二氏が一代で築き上げた窯元で、職人が13人おり、内「伝統工芸士」の資格保有者が4人もいる。「業務用食器」を中心に、「手



「向山窯・笠間焼プラザ」



「向山窯・笠間焼プラザ」の店内

作りの中級・高級品」を製造・販売している。当店には、笠間焼産地の伝統的なやきものと同時に、増渕氏が主張されるような笠間焼産地の窯元にとっての活路ともいべき「中・高級の業務用食器」が数多く並べられている。また、「笠間焼の原点」として笠間焼協同組合を中心に「ブランド化」を試みている「純笠間焼」も展示されている。店舗の奥は、ギャラリーコーナーになっており、美術工芸品の展示もある。

### ② 「ギャラリー陶芸館」

「向山窯」に隣接して、「ギャラリー陶芸館」がある。宇賀恵子氏が経営するこのお店は、陶器、お香、お地蔵様、オブジェ炭、陶器のおひな様等が展示された心温まるお店である。笠間焼の作家15人ほどの個展も行っていたが、最近、「他店と競合しない店づくりをしたい」ということから、お香、線香、香炉などを扱いながら、線香を中心にして地元の人と生活に密着した品揃え・店づくりを志向している。宇賀氏は、「観光客だけを相手にするのではなく、地元の方に足を運んで頂き、愛していただける店づくりを心がけていま



宇賀恵子氏

す。」と語られ、さらに、ギャラリーロード商店会活動については、「見て、歩いて、楽しいまちづくりを目指していきたい。」と抱負を語られている。

### ③ 「きらら館」



「きらら館」



「きらら館」の店内(販売コーナー)

「ギャラリーロード」を北に進んで「向山窯」の左手に見えてくるモダンな建物、赤い地にオレンジの星が目印の「きらら館」がある。当店は、日本屈指の陶磁器ショップであり、笠間焼、益子焼をはじめ国内の約650人の陶芸家の作品が揃えられている。しかも、10,000点以上の作品が季節によって変えられている。ギャラリー機能としては、入って左側の部屋において隔週替わりで陶芸作家の個展が開かれている。右側の販売コーナーは、道路側が全面ガラス張りで明るく、その奥には喫茶コーナーがある。そこには、作家の陶器カップが沢山並べられており、買い物の合間に気に入ったカップを選んでコーヒーや紅茶を無料で味わうことができる。また、有料だが自慢のソフトクリームは絶品である。

「きらら館」は、専業主婦であった岡部登志子氏（現取締役会長）が、趣味で始めた陶芸が高じて笠間の佐白山に窯をつくり、15年前、50歳の



岡部登志子氏

ときに当社を設立した。当社は、「窯元」であり、全国数百店と取引のある「卸売業」であり、さらに「ギャラリー」も兼ねた「小売業」でもある。陶器小売業の中では、信楽、常滑、益子等の同業他社を凌ぐ、全国屈指の販売店に成長した。岡部会長の「主婦目線」のサービスや工夫も注目されており、スタッフの手作りのメッセージカードや子供向けの商品配置等が最近テレビ取材を受け放映された（2013年9月、NHK水戸放送局「ひるまえほっと」）。長男で現社長の岡部雄一氏は、当社の営業力・販売力を高めて全国屈指の販売店に成長させた人であるが、後述のとおり、現在「ギャラリーロード商店会」の会長であり、本業同様に商店会の革新・活性化にも尽力されている。



「きらら館」の店内(喫茶コーナー)

### ④ 「さかさ川」

「さかさ川」は、茶道具・茶陶工芸の店であり、約20年前、「ギャラリーロード」ができる前から当地で店を始めている。女性店主の永地宗栄氏は、「そもそもこの店を始めた原点は、地元の著名な陶芸作家である伊藤東彦先生の作品が好きで、伊藤先生の作品を展示するためにこの店を開きました。その後、伊藤先生のお弟子さんたちの作品の企画展なども行いました。」とお話された。



永地宗栄氏

店主は、若いころから茶道に親しんでいたが、8年前には京都の裏千家の研修科に入り7カ月の修行も行った。裏千家の師範で、茶道界、大徳寺のお坊さんや茶陶の作家などと広い交流がある。また、店内には「利秀庵」と「妙蓮庵」という2つの茶室もあり、茶室を利用した茶道教室や浴衣の会等も行っている。ご子息の永地儀保氏も茨城県淡交会の役員を務めるなど茶道とかわりが深い。商店会の活動にも熱心に取組んでおられる。当店のお客様は、茶道教室の生徒さんも含めて、固定客が中心のようだ。

### ⑤ 「SPACE NICO」

「SPACE NICO」もユニークな「ギャラリー」である。オーナーの大嶋順子氏は、北海道出身。ご主人の大嶋



信之氏は、山口県出身の陶芸作家である。当店では、月1回陶芸やガラス作品の個展が開かれている。大嶋オーナーによれば、「当店のコンセプトは、面白い、かわいい、楽しい陶器とガラスのセレクトショップです。私の好きなもの、面白いもの、楽しいものを展示しています。」と語られた。顧客の9割は女性であり、常連客、リピーターが中心であるという。



大嶋順子氏



「SPACE NICO」個展の作品の一部

#### ⑥「ギャラリー曜耀」（有限会社 金澤美術）

当社の特徴は、「物故巨匠から若手作家までの美術品中心のギャラリー」である。水戸生まれ、日立育ちの金澤大介氏が創業者であり、同氏は2000年に美術品の鑑定機関である「東京美術倶楽部」のメンバー（メンバー数約500人、茨城県内では2人）に認められて創業した。ギャラリーの名前は、やきものの「耀（曜）変天目」の「よう」の字を2つならべたもので、書道家の川又南岳先生に考えていただいたという。有限会社金澤美術は、百貨店向け取引業務と美術品鑑定業務を中心としている。本業は、板谷波山、加守田章二など物故作家と全国の人気若手作家の作品の取扱い、若手作家の育成である。社員は金澤氏を含めて6名。古美術（物故作家）と若手作家の取扱いの構成は、金額では9：1、作品数では2：8とのことである。

陶芸作品の「目利き」として、「ギャラリーロード」にこのような店が存在することは産地の「芸術文化化」



「ギャラリー曜耀」

にとって極めて大きな意義があろう。また、後述するが、金澤氏は、「ギャラリーロード商店会」のリーダーの一人として、茨城県の「商店街活性化コンペ事業」への参加や「陶ISM in KASAMA」の企画をした人であり、「商工連携」の推進によって笠間焼産地の「産地革新」を推進している中心人物でもある。

#### ⑦「回廊ギャラリー門」

「ギャラリー曜耀」の向かい側にある「回廊ギャラリー門」は、「ギャラリーロード」に2002年に開業したが、この通りの中でもひと際目立った存在である。2つの蔵を25mの回廊で結んだ店内、中庭を囲む回廊に並べられた数多い陶磁器作品は見ごたえがあり、陶磁器以外にも箸・漆器・民芸人形・李朝家具などが陳列されていて、東洋美術館の中にあるような雰囲気が味わえる。また、一番奥の部屋では、隔週にて個展、企画展が開催されており、営業は年中無休である。一般顧客からもプロの業者からも注目されている「ギャラリー」である。

創業当初は、笠間焼産地の作家・窯元・関係者など10人が発起人になって設立されたが、その後、銀座で箸の専門店「銀座夏野」等を経営される高橋隆太氏が経営されている。店長の羽石公子氏によれば、「個展



「回廊ギャラリー門」



回廊から中庭を望む



の作家や展示してある80人ほどの作家の作品の選定は、オーナーと現場で相談しながら決めております。笠間の作家が9割程度ですが、益子を含めて全国の作家を対象にしております。お客様は、女性客が中心、リピーターが中心で、土日は遠くからもお出でいただいております。」とのことである。テレビ等の取材も受け、来店客は増加傾向にあり、通りの「集客」を高めている。



「回廊ギャラリー門」の店内



「回廊ギャラリー門」の中庭

### ⑧ 「Glass Gallery SUMITO」

「Glass Gallery SUMITO」は、梅本純人氏が2004年に出店したガラス工芸の専門ギャラリーである。梅本氏は、「笠間の『ギャラリーロード』には、芸術の街としての雰囲気があって気に入っている。当店は、ガラス作家の手作りの作品を展示しているが、こうしたガラスギャラリーは全国的に見ても少ないと思う。」と述べられている。常設展示のほかに3週間毎に企画展を行っている。テーマにマッチした作家をピックアップしていると言い、作家は80人程である。顧客は、東京、宇都宮、千葉等、県外客が中心とのことである。ガラスも陶磁器と同様に窯業の一分野であるが、陶磁器中心の「ギャラリーロード」の「ギャラリー」の中で、当店はガラス分野の個性的な「ギャラリー」として異彩を放っている。



梅本純人氏



「Glass Gallery SUMITO」の店内

### ⑨ 「ギャラリー舞台」

「ギャラリー舞台」は、「ギャラリーロード」の丘のピークに近い場所にあり、向かい側にはおしゃれなプチホテル、リゾートホテル風の「ホテルイオアル



「ギャラリー舞台」

フェラッツ」がある。良く手入れされた木々や草花で囲まれたこの店は、店名が示す通り作家の作品発表の「舞台」のようだ。オーナーの山田真弓さんは、「もともとの地名が舞台というところから店名にしました。」とさりと言われた。山田さんは、熱海市出身で、長らく国際線の客室乗務員をされていた。休みに笠間や益子の陶磁器市に来るようになって陶磁器に興味をもち、当初は2足のわらじで開業、3年あまり前に早期退職して専業になったということだ。

当店の特徴は、「使える器」「料理したくなる器」を中心に扱っており、約40作家（9割が笠間焼）のやきもの・ガラス・鉄作品を展示販売していること。そして、若手作家の展示会を行っていることも特徴のひとつである。山田さんは、「笠間のイベント等で若手の目にとまった作家がいたら声をかけて、当店で個展をしてもらうこともあります。『育てる』とまではいきませんが、若手作家を『紹介』『応援』したいと思っています。」といわれた。正に、当店は、若手作家にも発表の機会を与える「舞台」になっているようだ。

販売面では、乗務員時代の接客経験や人を見る目が活かされており、お客様に笠間のやきもの情報だけでなく、イベントや飲食店の情報等も紹介して満足いただいているとのことだ。「笠間の“旬”な情報をお伝えして、笠間をまるごと楽しんでほしいと、いつも考えています」とブログでも発信し

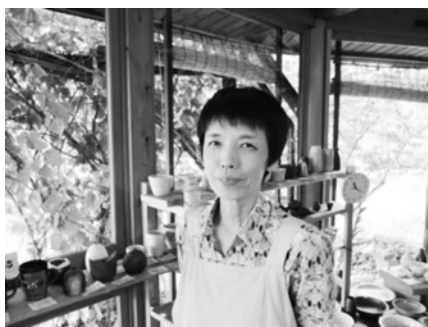


「ギャラリー舞台」の店内

ている。

そして、「乗務員時代は、お客様とは一回限りのお付き合いでしたが、ここでは継続したお付き合いができるのが楽しみです。

当店は、お客様と会話も楽しむ『しゃべるギャラリー』なのです。」といかにも楽しそうに語られた。



山田真弓さん

#### ⑩「カフェギャラリーせらぎい」

「カフェギャラリーせらぎい」は、「ギャラリーロード」の丘のほぼ頂上に位置し、木々に囲まれた三角屋根のおしゃれな建物とオープンテラスが目印である。周辺の畑を所有されていたご主人の先祖の土地を利用して、川俣洋子氏が15年前に始めた。その後サラリーマンを辞めたご主人と娘さんもお店を手伝うことになった。川俣さんは女流画家協会の作家で、この店の「ギャラリー」にも作品が展示されている。

この店の特徴は、「ギャラリーを兼ね備えたカフェ」で、お店の約3分の1がギャラリースペースになっている。カフェの窓際には川俣さんの目にかなった笠間焼作家の陶磁器が展示され、奥のギャラリースペ



「カフェギャラリーせらぎい」

ースでは絵画や陶芸作品の個展が開かれる。カフェでは、おいしいコーヒーに加えて、裏の畑で採れた自家栽培の野菜を使ったサラダ、ご主人特製のスパゲッティナポリタン、スイス直送のパン等がいただける。このお店も、県外客を中心にした固定客が多いようだ。



「カフェギャラリーせらぎい」の店内



「カフェギャラリーせらぎい」のギャラリー

以上見てきたように、「ギャラリーロード」の「ギャラリー」は、レベルの高い、個性豊かな「ギャラリー」が多い。そして、本稿で紹介できなかった「ギャラリー」も含めて、全体としての「多様性」がこの通りの「魅力」となっている。また、本稿では、「ギャラリー」を中心に紹介したが、この通りには、和食レストラン「笠間みんげい」、貨物列車の車掌車を利用したユニークなカフェ「かしゃま文化会館」、広い駐車場の中に個性なお店が沢山あった「笠間民芸の里」、その中でも最近特に注目されているシニアのボランティア団体が運営する「グランパとグランマのお店」、「美食亭・鯨あい澤」、「そば一兵衛」、季節料理「樽」、木々に囲まれた洋風のカフェレストラン「ワスガゼン」、そば処「柊」、店内からの眺望が素晴らしい家庭的な雰囲気の喫茶店「ドロップイン」、「ホテルイオアルフェラッツ」と付帯した「笠間 森のレストラン Monomi」、手作り豆腐・豆乳のソフトクリームやドーナツ等がおいしい「佐白山のとうふ屋」、笠間



「ホテルイオアルフェラッツ」



カフェレストラン「ワスガゼン」



喫茶店「ドロップイン」





欧風料理「チェルキオ」

の市街地が一望できる欧風料理「チェルキオ」等、いずれも個性的で、素敵な飲食店等が沢山ある。



「陶ISM in KASAMA」の看板

### ■ 3. イベント「陶ISM in KASAMA」に見る新たな「産地革新」の息吹き

#### (1) イベントの趣旨・概要

2013年9月21日から23日までの3日間、「ギャラリーロード」において、「陶ISM in KASAMA」という画期的なイベントが開催された。これは、「ギャラリーロード商店会」が「茨城県商店街活性化コンペ事業」に参加し、最優秀プラン受賞をした対象事業の一つでもある。主催は、「ギャラリーロード商店会」を母体とした「陶ISM in 笠間ギャラリーロード」実行委員会（金澤大介委員長）と「陶ISM実行委員会」である。商店会は共催者であり、茨城県と笠間市の協力も得ている。

このイベントの趣旨は、「『全国の若手陶芸家』と『やきものの町の商店会』が一緒に作る『特別な文化祭』であり、笠間市を訪れた全てのお客様が陶芸の楽しさを色々な角度から体験できるイベント」とうたわれている。



「陶ISM in KASAMA」のメイン会場付近

商店会（商）と陶芸作家（工）とが「連携」して、集い、学び、語り合い、展示・販売し、客を集め、ひいては

産地や業界を「革新」しようという、極めて志の高い「イベント」企画として評価できる。

「ギャラリーロード」と連携する相手である「陶ISM」とは、「これからの若手作家・ギャラリー・ショップ・オーディエンスが既存の価値観や枠組みに囚われることなく、個人レベルでの仕事構築、お互いに交流を深め、それぞれが可能性を次に繋げていくための『Tool』そして『場』です。」と定義されている。「陶ISM」は、益子の若手作家である二階堂明弘氏と栗谷昌克氏、笠間の若手作家であるKeicondo氏と今井梨絵氏らが中心になって活動してきた若手陶芸作家集団であり、全国にメンバーを求めている。今回参加する作家は45人である。なお、このような若手陶芸作家の集まりは、全国に2つあって、「陶ISM」の他に岐阜県多治見市の青木良太氏が主宰する若手陶芸作家集団「イケヤン (IKEYAN)」がある。そして、その両方に参加している作家も多いという。

#### (2) イベント・ワークショップの内容

イベント・ワークショップの内容は表2の通りである。2013年9月21日～23日の3日間の間で時間割が決められ、事前予約制もとられ、興味のあるイベントに参加することができる。もちろん、作家だけではなく一般客も自由に参加することができる。

(表2) イベント・ワークショップ一覧

	イベント名	内容	講師	会場	参加費
1	箱書き勉強会	作家向け箱書きレッスン	書家・根本知氏	笠間民芸の里	2,000円
2	寄せ植え体験	破損した器に多肉植物を植える	ポタニカルアーティスト・景山明氏	笠間民芸の里	1,000円
3	利き酒会	作家物のぐい呑みで笠間の地酒	ギャラリー・曜燿、陶芸女子他	笠間民芸の里	無料
4	「波山をたどる旅」映画上映会	板谷波山についての解説と映画	ギャラリー・曜燿・金澤大介氏	ホテルイオアルフェラッツ	1ドリンク制
5	ラッピング講座	購入した器を素敵にラッピング	きらら館	きらら館	100円
6	とうふ食べ放題	豆腐を食べる器展で購入した人向		佐白山のとうふ屋	100円
7	「やきもの」を語る会	やきもの現状・今後を語る公開討論		ドロップイン	1,000円(お茶・ケーキ付)
8	フラワーアレンジメント教室	マグカップに活けるアレンジメント	フラワーデザイナー・木村善子氏	ドロップイン	1,500円(お茶付)
9	お茶席・呈茶	裏千家流茶道の本格的なお点前	裏千家師範・永徳宗栄氏	さかさ川	500円





寄せ植え体験



お茶席・呈茶



利き酒会のスタッフと筆者

箱書き勉強会、「やきもの」を語る会、フラワーアレンジメント教室、お茶席・呈茶等のイベントは、どちらかというと若手の陶芸作家向けで、作品の創作や販売に付帯した知識を習得する機会として活かされそう。寄せ植え体験、利き酒会、「波山をたどる旅」映画上映会、ラッピング講座、とうふ食べ放題等は、一般客も若手陶芸家と一緒に楽しめる企画である。

利き酒会は、本イベントに参加した「陶ISM」作家のぐい呑みが並べられ、参加者は自分の好みのぐい呑みを選んで利き酒ができる。利き酒の対象となる地酒は、笠間市内の4つの酒蔵の「郷乃誉」（須藤本家）、「松緑」（笹目宗兵衛商店）、「東海」（武藤酒類醸造）、「稲里」（磯蔵酒造）の銘酒である。笠間焼協同組合ではかつて笠間焼作家と茨城県内の酒蔵との「酒と器のコラボレーション展」を実施して好評を博したが、今回の利き酒会も異業種の地場産業同士のコラボレーションとして意義のある企画であった。

商店会メンバーの豆腐屋さんである「佐白山のとうふ屋」の河原井信之氏の企画は大変楽しく盛り上がったようだ。河原井氏は6人の作家に、「豆腐を載せて美

味しく見えるお皿」と「切れ味のよい醤油さし」を発注した。それを店内で展示し、それを購入したお客様を対象に参加費100円でおいしい豆腐が食べ放題というユニークな企画である。会場が笑いの渦に包まれたこのイベントで、優勝者は14杯、準優勝者は13杯の豆腐を食べたとのことである。店主の河原井氏は、「皆さんがお腹いっぱい豆腐を食べてくれて最高に嬉しかった！ 本当に楽しかった！」とフェイスブックで感想を発信されている。

お茶席・呈茶は、「さかさ川」の茶室で行われた。亭主はオーナーの永地宗栄氏である。陶芸家の作品を使って、一般のお客さんが陶芸家と一緒に茶席を楽しんだり、作法を教えていただいたり、お茶碗を観賞をしたり、狭さを感じさせない茶室でゆったりした時間を感じることができる贅沢な体験会であった。

「波山をたどる旅」映画上映会は、茨城が生んだ陶芸の巨匠である板谷波山の生涯をたどる映画だが、この企画のオリジネーターであり解説者である「ギャラリー曜」の金澤大介氏は美術品鑑定士として波山の作品に造詣が深いだけでなく、波山に関する2本の映画



「とうふ食べ放題」での河原井信之氏



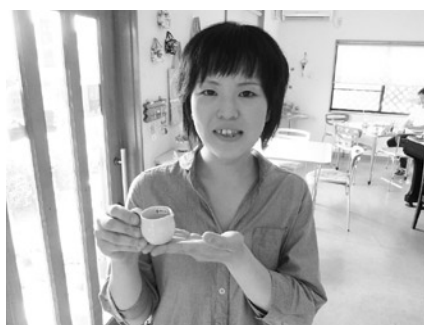
「とうふ食べ放題」の表彰式



「きらら館」の「野外芝生でオブジェ展」



「せらぐい」のギャラリーで川俣洋子氏



「ドロップ・イン」にて笠間の作家・菅原佳苗氏



笠間のKeicondo氏・大阪の田中雅文氏・堀口彩花氏

作品（「HAZAN」「波山をたどる旅」）でプロデューサー的な役割を果たした方である。このような美術品と映画の「プロ」が身近に存在し、直接解説を聞ける機会があるということは何という贅沢な企画であろうか。

「やきもの」を語る会は、作家、販売店、オーディエンス等が立場も年齢も超えて「やきもの」の現状と今後を語る公開討論という触れ込みであった。金澤大介氏から伺ったところ、「当日は、若手陶芸家（笠間・益子の『陶ISM』メンバーと大阪から参加した作家など）、ギャラリーロード商店会メンバー、『陶芸女子』、一般参加者等が参加し、座談会のような雰囲気で行った。100円ショップの食器と陶芸作家の作品は何が違うのか、『陶ISM』メンバーへのアンケートでは100%の作家が子供のころに陶芸体験をしていたという事実、『食育』として幼少期に自分で作った器でご飯を食べる体験の重要性等、興味深い話題が出され多くのことが討論された。」ということである。

### (3) 企画展示の内容

(表3) 企画展示一覧

	店名	テーマ名	会期
1	きらら館	マグ自慢展	9月1日～30日
2	きらら館	野外芝生でオブジェ展	9月1日～30日
3	向山窯	フリーカップ展	9月14日～29日
4	ギャラリー陶芸館	香を楽しむ器展	9月14日～29日
5	さかさ川	若手陶芸家茶道具展	9月21日～23日
6	笠間民芸の里	若手女性陶芸家展	9月21日～23日
7	ギャラリー曜耀	笠間の地酒と酒器展	9月14日～29日
8	蕎麦処 柘	蕎麦猪口と薬味皿展	9月21日～23日
9	ドロップ・イン	笠間の景観とカップ展	9月14日～29日
10	ギャラリー舞台	新米と秋刀魚の器展	9月14日～29日
11	佐白山のとうふ屋	豆腐を食べる器展	9月14日～29日
12	せらうい	中世ヨーロッパの世界展	9月1日～30日

企画展示の一覧表は、表3の通りである。

前述の「ギャラリー」各店、「きらら館」、「向山窯」、「ギャラリー陶芸館」、「さかさ川」、「ギャラリー曜耀」、「ギャラリー舞台」、「せらうい」が、それぞれにテーマを設定して若手陶芸作家の作品展示を行った。「ギャラリー」以外でも、「笠間民芸の里」で「若手女性陶芸家展」、「蕎麦処柘」で「蕎麦猪口と薬味皿展」、「ドロップ・イン」で「笠間の景観とカップ展」、「佐白山のとうふ屋」で「豆腐を食べる器展」など、それぞれのお店に係わりがあるテーマで企画展示を行った。「ギャラリー」のみならず商店会の他業種企業と陶芸作家たちの「連携」という意味で、大変意義のある企画であると評価できよう。

また、作家の作品を展示している各店舗・「ギャラリー」には、作家が在席し、お客様と気軽に会話をし

たり、作品について丁寧に説明してくれたりする光景も見られ、好評であった。

### (4) 評価と感想

本イベントの評価は、今回が初回であり、かつ、開催後まだ日が浅いこともあって現時点では難しいが、このイベントで、多くの「連携」、「コラボレーション」、「ネットワーク」等いわゆる「産地革新」の契機となる数多くの内容を見出すことができ、新たな「産地革新」の息吹きを感じる事ができた。

1つは、「商工連携」である。ギャラリーロード商店会（ギャラリー・販売店・飲食店等）と笠間焼産地の若手陶芸作家との「連携」は、商店会の活性化のみならず、地場産業産地の新たな「産地革新」のきっかけになりそうな気配を感じる事ができた。

2つは、笠間焼産地内の若手作家と益子や全国の若手作家とが、本イベントを通じて多くの「出会いと交流の機会」を持って、「ネットワーク」が形成された。

3つは、本イベントの協力者として、茨城県や笠間市のみならず、窯業指導所（佐藤茂部門長他）、「地域おこし協力隊」のメンバー（中島良子氏、島田奈実氏）、やきものの魅力を発信する女性の愛好会「陶芸女子」のメンバー（小松崎友紀氏、八島怜子氏他）、シニアのボランティア団体である「グラウンドワーク笠間」のメンバー（埴茂氏他）等、広い組織・団体の協力があり、主催者と彼らとの「連携」が強化された。特に、「陶芸女子」は、数年前に「ギャラリーロード」で多治見の「イケヤン」を招いて交流会を行った際に、美術館の女性スタッフや「ギャラリー」の女性スタッフらが女子会を立ち上げたもので、その後、笠間発の全国組織に発展し現在130名（内笠間40名）の規模になっているという。今回、その「陶芸女子」が、イベントのチラシやパンフレットづくり、ワークショップのサポートなどを手伝ってくれた。

4つは、笠間焼産地の中で、やきものを核とした様々な日本文化との「コラボレーション」が行われ、若手の陶芸作家を啓発したことである。茶道、華道、書道、香道をはじめ、日本食、蕎麦、豆腐、日本酒など伝統的な和食文化とやきものとの「コラボレーション」が展開された。

本イベントの仕掛け人の一人である金澤大介氏に現時点での評価を尋ねたところ、次のような回答をいただいた（2013年9月27日）。「商店会や参加作家からは、新しい交流が生まれたことや人が回遊したことを喜ぶ声が多かった。作家と商店会・町との融合という目的は果たせた。反省点は、一般参加者への目が向いていなかったことや売上につながっていないことなどがあ



げられる。」というものだった。

窯業指導所の久野亘央氏は、「今回の若手陶芸家の展示・発表の仕方を見て気付いたことは、自分の作品をお客様や社会に『わかりやすく』工夫して説明・アピールしており、そこに作り手の新しい価値観が見いだせて嬉しくなりました。こうしたことが産地にインパクトを与え、販売力やブランド力の強化にもつながっていきそうな感じがします。」と示唆に富むコメントをされた。

笠間焼産地では、すでに「陶炎祭」や「笠間浪漫」をはじめとするやきものに係わる大きなイベントが毎年開催されているが、本イベントは、そうした大きなイベントとは趣を異にし、小ぶりのイベントではあるが、じっくりと深く楽しめ、さらに、一つの商店会が主導したイベントではあるが将来的に産地全体、地域全体の「革新」につながりそうな息吹きを感じさせるものであった。今回の試みは特筆するに値しよう。今後も継続されることを期待したい。

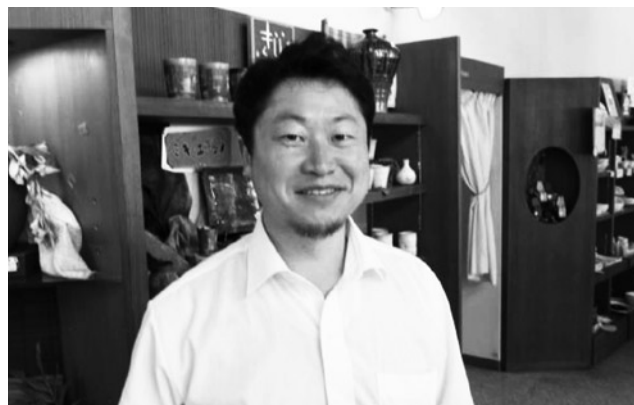
#### ■ 4. 「ギャラリーロード」の仕掛け人たち

最後に、以上のような新たな「産地革新」につながるような取組みをしている「ギャラリーロード」の仕掛け人たちの中から以下の6人を選び、紹介したい。

まず、「ギャラリーロード」の3人のリーダー、すなわち、(1)「きらら館」の岡部雄一氏、(2)「ギャラリー曜」の金澤大介氏、(3)「佐白山のとうふ屋」の河原井信之氏の3人を紹介する。3人に共通する点は、①年齢が1歳ずつ違うが同世代であること、②社長になるまでの経緯が劇的であること、③本業での経営力が優れ、パフォーマンスも良いこと、④商店会活動に熱心であること、⑤ネットワークが広く、全国的であること、⑥地域活動や社会貢献活動にも取り組んでいること等である。

次に、(4) 彼ら若手の経営者をサポートし、自らも伝統工芸士の資格を有して窯元「向山窯」を運営し、笠間観光協会会長の要職にある増渕浩二氏、(5) 70歳にして若々しく、シニアクラスの市民を主体とした「NPO法人グラウンドワーク笠間」を立ち上げ、「ギャラリーロード」を足がかりに様々な地域活性化事業に取り組んでいる塙茂氏、(6) 貨物列車の車掌車を利用した「かしゃま文化会館」というユニークなカフェギャラリーで「車掌」という名の経営者として地域の「サロン」「コミュニティセンター」「ミニ文化センター」等の機能を担う井上あや氏の3人を紹介する。

#### (1) 岡部雄一氏：「共存共栄」・「日本一のやきもの通り」をめざして



岡部雄一氏

「きらら館」の岡部雄一氏は、現在、「ギャラリーロード商店会」の会長も務めておられる。

岡部氏は、水戸で生まれ育ったが、中学・高校時代はオリンピックを目指して水泳に明け暮れていた。0.3秒をいかに縮めるか、目標に向かって邁進したという。大学受験で初めて挫折を味わい、二浪目のときに水泳を諦めて東京の大学に入って真面目に勉強し始めた。大学2年のときに、今でいう「学生ベンチャー」を立ち上げた。当時「就職氷河期」と言われた時代の中で、大学生向けに就職あっせん、講習会、セミナーを行う会社である。同氏は、このころから営業力抜群であったようで、事業も大ヒットし、大学3～4年のころにはかなりの給料を得ていたという。大学卒業後、一年半ぐらいその事業に従事し、その後、後輩に事業を引き継いだ。祖父が創業した魚市場を引き継ぐ夢も持っていたが、母が病気になったことから、母が設立した陶芸工房・販売店を手伝うことになった。陶芸には興味がなかったが、母の勧めで窯業指導所に通い、半年間、釉薬の勉強をした。その後、紆余曲折はあったが、当社入社覚悟を決め、今度は自分から母にお願いして「きらら館」に就職したという。そして、3年前に、「きらら館」の社長に就任した。

親子二代で知恵を出し合って経営する「きらら館」は、今や「ギャラリーロード」の「顔」であり、さらに、「日本一の陶器小売店」である。また、「きらら館」は、母の岡部登志子氏が作家であるほか3人の作家を擁する「窯元」であり、販売スタッフを7人抱える「卸・小売業」でもある。根っからの営業好きな岡部氏は、自ら全国で開かれる「陶器市」にも参加する。益子、九谷、有田、瀬戸等の同業者と競争していたが、この5年で当社はトップクラスに躍進したという。

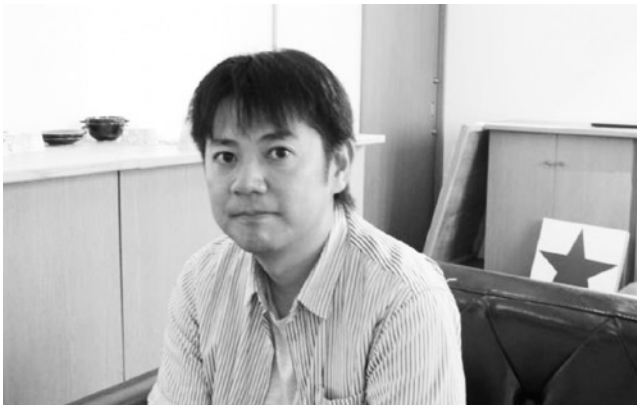
岡部氏の経営方針を伺うと、「いつもスタッフのことばかり考えています。他人に縛られて仕事をし、小



さく納まってしまうのではなく、一人ひとりに自由に仕事をやらせたいのです。自分の経験を手本に、スタッフにそれぞれの夢を実現させてあげたいのです。今度、スタッフの一人が、この通りでパン屋さんを始める予定です。」と熱く語られた。

岡部氏は、「ギャラリーロード商店会」のリーダーとして、多様なお店の「共存共栄」を主張される。「『ギャラリーロード』に来られるお客様は、土日は平均4~5店の買い回りをされるというデータがあります。そうした中で、当店のみが頑張ってもダメで、他のお店も見てみたいと思わせるような魅力的な個店の集合体にこの通りを作っていきたいです。そのために、みんなで頑張って通り全体の魅力を構築したい。そして、『日本一のやさきも通り』にしたい。また、陶芸美術館や笠間工芸の丘などの公的施設は集客に役立っているので、そことも『共存共栄』を目指したいです。当店は、笠間の観光案内所の役割も果たしており、陶芸美術館等の案内もしています。」と抱負を語られた。

## (2) 金澤大介氏：「目利き」として若手作家の発掘と育成に取り組む



金澤大介氏

「ギャラリー曜耀」の金澤大介氏は、水戸で生まれ日立で育った。高校を出ると東京での一人暮らしにあこがれて上京。青山骨董通りにある美術商・江戸屋美術（魯山人の専門店）で11年間、丁稚奉公をして金澤美術を創業した。修行時代は、仕入から販売までを総合的に担当し、また、交換会「市場」で、毎日、何千点もの骨董品に接しながら目を鍛えたという。日本画、洋画、陶磁器、刀剣、西洋骨董等に接した。そして、2000年に、「東京美術倶楽部」のメンバーに認められたことをきっかけに独立した。「東京倶楽部」は、鑑定機関でもあり、資格要件が厳しく、倶楽部員である事は、業界の信用を得られる。全国のメンバー数は約500人で、茨城県内では2人目であるとのことだ。

このような「目利き」の金澤氏に仕事の夢・使命を伺うと、「私の仕事は、陶芸作家で文化的な価値のあ

る人に市場性を付与してあげることです。陶芸収集には、①好きで使い、楽しみ、食卓に置くタイプ（10万円以上の支出はしない）と②美術品として収集し、再販価格も気にするタイプの2種類あります。私が係わるのは後者で、『人気作家』の作品の市場における相場形成に係わる仕事です。その価格までは絶対に買うという下支えをし、保障する価格を形成することに係わります。そのように強烈に作家の作品の値段を下支えしてくれる業者とコレクターの存在が作家の作品の相場を形成しているのです。また、そのようにして『業者間相場』が形成されると、コレクターも安心して作品を購入できるわけです。もっとも、作家はこのような裏事情は知らないし、古物市場や二次的市場に抵抗感を持つ作家も多いのですが、私は、本気になって優れた作家を応援し『人気作家』になってもらうように労力の要る仕事を行っています。」と、目を輝かせて語ってくださった。

笠間焼産地について、全国の陶磁器産地を相手に仕事をしてきた観点からみてどうかを尋ねると、「自分は笠間に対する思い入れが強く、笠間を良くするためにお手伝いをしたいと思っています。笠間の弱みは、販売システム、販売業者が弱いこと、外部に対する情報発信力が弱いことです。このため、大市場・東京での知名度が他の産地に比べて低いようです。最近、笠間でも笠間焼協同組合に青年部ができて作家中心に新しい動きが出てきましたが、PRやブランド化の仕掛けがもっと必要に思われます。専門家のノウハウも使いながら行政と販売店が一体となって作家をサポートすることも必要で、益子町役場のタウンプロモーション専門の部署の取組み等も参考になるのではないのでしょうか。」と答えて下さった。

今回の「ギャラリーロード商店会」での「陶ISM in KASAMA」というイベントの発起人は金澤氏であるが、次のように語られている。「私は、美術品や本物を見てきた人間として、本物の良さを伝えるために、若手作家を教育することも大事な仕事と思っています。1年半前に、商店会で、笠間と益子の若手作家が中心になったイベントを全国の若手作家を対象にして、この『ギャラリーロード』で開催することはどうかと提案しました。はじめは皆がピンと来ていませんでしたが、繰り返し説明して今回実施の運びとなりました。」「若手作家の中には『イケヤン』や『陶ISM』のように、一人ひとりの力が弱いので集団で動こうとする新しい動きがあります。私は、日展や工芸会等に代表される権威のある陶芸作家の方々と若手作家の結びつきを持たせることに尽力したいと思っています。特に、若手作家に本物の良さを伝え、日用雑器づくりで

生きていくのか、世の中に残るものを作る作家になるのか、明確なビジョンを持たせたい。そうしたことも今回の企画の背景にありました。」ということである。金澤氏のお話の中に、本イベントの「志の高さ」と産地の「芸術文化化」をさらに促す要素を感じ取ることができた。

なお、金澤氏は、本業以外に映画のプロデュースも手掛けられている。茨城県と係わりの深い「HAZAN」(2003年)、「波山をたどる旅」(2013年)、「桜門外ノ変」(2010年)等に関係され、「地元発信の映像作品を制作し、講演会や上映会、またイベント等を通して市民と連携した『まちづくり』を行う」という「プロジェクト茨城」の事務局・代表を務めている。そして、現在、百田尚樹のベストセラー小説「永遠の0」の映画化と連動させて、笠間市内に当時の史跡が残っていることも重視して、「筑波海軍航空隊プロジェクト」を立ち上げている。笠間市も「支援する会」を作って協力している。

### (3) 河原井信之氏：「地域おこし」は内側からの盛り上げ・盛り上り



河原井信之氏

「佐白山のとうふ屋」の河原井信之氏(43歳)は、笠間の「ギャラリーロード」近辺で生まれ育った。そして、もともと2級建築士の資格を持ち建設会社で働いていた。父の信一氏(73歳)が、自動車ディーラーの役員を退任した後64歳で自宅わきの畑で「豆腐屋」を開業。事業が大ヒットして超多忙となり、このままでは父が危ないと、親孝行息子は建築士の仕事を辞めて笠間に帰り、親子2代で豆腐作りをすることにした。その後、「手づくり」・「原材料」へのこだわりや国の「農商工連携事業」の認定を受けた新商品「茨城在来とうふ」の開発販売等、「新たな挑戦」によって親子二人三脚の経営は大成功をおさめている。そして、「ブランド力」も高まり、今年は、東京から「はとバス」も立ち寄るようになった(拙稿「茨城における新時代対

応型中小企業」[筑波銀行調査情報]2013年1月号参照)。

河原井氏は、本業に一生懸命取り組んでいるが、持ち前の明るい性格から人脈が広く、商店会の活動でもリーダーとして活躍してきた。今回の茨城県のコンペ事業でも、①「陶ISM in KASAMA」と②「親子雛プロジェクト」の二つテーマの内、「親子雛プロジェクト」の取りまとめ役である。それらは2つとも「やきものを通じた交流」プロジェクトであり、①は「陶芸家との交流」、②は「地域交流」として位置づけておられる。

「親子雛プロジェクト」について、河原井氏は「『親子雛プロジェクト』は、自分が親子会の会長だった2008年に始め、今まで6回実施しました。当初の動機・目的は、2~3月は商店会のイベントがなく、集客力が弱かったので、地域の人が参加でき、商店会と一緒にできるイベントとして企画しました。親子の絆を深め、地域の商店会との関係も深まるようなイベントとして、幼稚園と商店会とのコラボを企画したのです。その中で行った『スタンプラリー』は、5店でスタンプをもうらうと500円分の金券としてギャラリーロードでの買い物に使えるというのですが、これで『ギャラリーロード』の商店とのなじみができるようになりました。笠間幼稚園児111人、こじか幼稚園児53人の合計164人の家族が4人として、約700人の回遊者ができるわけです。また、それまで地元の人たちの『笠間焼』に対する認識は『観光資源』であって、身近なものとは感じていませんでした。それが、『スタンプラリー』を通じて『笠間焼』を『普段使いの身近なもの』に感じてもらえるようになり、これで笠間内部から、笠間市民1人ひとりが、『笠間焼』の宣伝マンになることができた訳です。」

このように、河原井氏は、「親子雛プロジェクト」も、笠間焼産地を内側から盛り上げる「地域おこし」プロジェクトの一つ



「スタンプラリー」で用いた「スタンプ帳」

であるとされた。

さらに、親子雛をつくるために子供たちが粘土に触れることは、原体験として大人になっても印象に残りやすく、将来の陶芸作家を生むために重要なことであると位置づけ、「笠間陶芸家エリート構想」と名付けて笠間焼産地の発展に結び付けておられる。

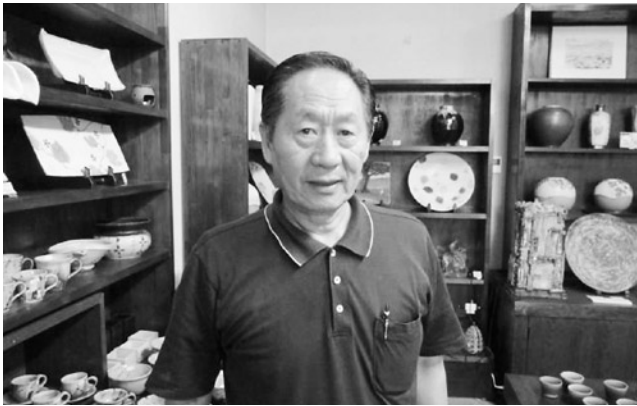
河原井氏は、地域貢献活動としてこの他に「カサマメプロジェクト」のリーダーも務めている。それは、「自分たちの居住地域の近くの畑で自分たちが生産した大豆で豆腐を作って、笠間焼の器に入れて皆で楽しく豆



腐をたべよう」というもので、笠間が好きで、大豆が好きな人たちが集い、豆を作って、取れた豆を豆腐にして、笠間焼の器で食べるというプロジェクトである。

河原井氏に「地域おこし」の考え方を伺った。「笠間には、里山、神社、やきもの、文化等沢山の魅力がありますが、地元の人には馴染みすぎて気付かないものも多いようです。私が係わる『カサマメプロジェクト』や『親子雛プロジェクト』は、笠間の魅力を知るきっかけづくりを目指しています。内部が盛り上げていると外から見て魅力的に見えます。『地域おこし』では、内側からの盛り上がり・盛り上げが重要であると考えております。」と自説を強調された。

#### (4) 増渕浩二氏：窯元による「笠間焼産地革新」の推進者



増渕浩二氏

観光都市・笠間の観光協会会長を長く務め、また、窯元「向山窯」の経営者として「ギャラリーロード」にもアンテナショップを持ち、「ギャラリーロード商店会」の若きリーダーたちの良き理解者・支援者として君臨するのが増渕浩二氏である。

増渕氏は、笠間市観光協会会長の立場では、「『ギャラリーロード』は『新しい町』ですが、『やきものの町』としてふさわしい店が多く、新時代の魅力を創出していける要素が多い町です。笠間稲荷門前通りとは違った『新しい町』として、この二つの町が両輪となって発展してほしいと願っております。笠間市も、7年後の東京五輪までに、日本文化を備えた観光都市として海外からの客も誘致できるような対応を考えたいと思っています。」と述べられた。

また、伝統工芸士の資格を持ち、笠間最大の窯元の経営者として、次のような示唆に富むお話をしてくださいました。『窯元』と『ギャラリー』には違いがあります。『ギャラリー』は、自分の目にかなったもののみを置き、自分の思いやセンスを込めたものを集めて販売することができますが、『窯元』は、そうはいきません。ものづくりをする人の宿命で、完成度において発展途上で

あり、いつも未完成であることを感じています。『ギャラリー』や販売店は、完成度の高いものを仕入れればよいわけですが、『窯元』は作り手であるためそうはいきません。こうした点で、『ギャラリー』が羨ましいと思うこともあります。お互いに、ないものねだりかもしれません。」「これからの笠間焼産地にとって重要なことは、作家、窯元、ギャラリーが『連携』を強めることです。たとえば、作家やギャラリーに量産品の引き合いが来た時には、窯元は量産できるので、産地に金が落ち、経済効果が出るような『産地内連携』を図ることが重要です。」「笠間焼産地の伸びしろは、レベルの高い『業務用食器』をつくることにあります。『業務用食器』では有田産地がダントツ1位ですが、笠間には技術があり、大市場に近いという地の利もあります。日本食ブーム到来の時代に、多様で奥行きのある和食器を中心にした『手作りの中級・高級業務用食器』に活路を見出すべきであると思います。」と、笠間焼産地の革新の方向性について、熱く語って下さった。

#### (5) 塙茂氏：シニアクラスの地域創造活動「グラウンドワーク笠間」のリーダー



塙茂氏

塙茂氏は、笠間市出身、昭和17(1942)年生まれの70歳の「若者」である。長年、日立工機に勤められ、57歳で退職された後、地元中小企業の役員や社長を歴任されて、2011年11月に市民活動組織「グラウンドワーク笠間」を設立され、翌年3月にNPO認証を取得された。

社会貢献活動をしたいと思っていた時に、英国発祥の「グラウンドワーク」に出会い、2011年7月に、「グラウンドワーク三島」の企業支援、インキュベーションの勉強会に参加した。その後、地域コミュニティである笠間市20区の祭仲間やゴルフ仲間と話し合い、1年半後に「グラウンドワーク笠間」を立ち上げた。現在、活動している仲間は40人、平均年齢は65歳、全員が年金受給者である。基本目標は、「①地域の未来に笑顔の種をまこう！、②シニアが“元気に自立”し輝くまちづくりを！、③片手にスコップ&片手に缶ビー



「グラウンドワーク笠間」の「グランパとグランマの店」

ル」、である。

内閣府の被災地復興支援補助金や笠間市の町おこし助成金を獲得しながらボランティアベースで各種事業を展開している。中でも、現在の中心活動は、「ギャラリーロード」の「笠間民芸の里」で「街なかカフェ」・「グランパとグランマの店」を始めたことである。これは、空き店舗の再生事業であり、ボランティアメンバーが美味しい食事を提供するほか、自分達で作った野菜やその加工品などの販売も行っている。また、最近では、「陶ISM in KASAMA」イベントにも積極的に参加し、「ギャラリーロード商店会」のメンバーや若手陶芸作家等との交流を深めている。さらに、「まちおこし協力隊」のメンバー等とも農業やイベント等で「連携」を図っている。

埴氏の関心は、「シルバー起業」、「ソーシャルビジネス」、「コミュニティビジネス」など時代の先端を走っており、耕作放棄地を活用した「笠間野菜」のブランディングや6次産業化、障害者の自立支援と雇用など、夢が広がっている。埴さんのような意欲的で経験豊かなシニア層が「ギャラリーロード」の若い経営者と「連携」、「コラボレーション」を図ることからも新しいビジネスが創造される可能性が高いと思われる。

#### (6) 井上あや氏：ユニークなカフェギャラリー「かしゃま文化会館」の「車掌」さん



井上あや氏

ギャラリーロードの南端、「向山窯」や「陶芸館」付近に貨物列車の車掌車を利用したカフェギャラリー「かしゃま文化会館」がある。もともとの車両は、笠間焼産地最古の窯元である久野窯（現在の久野陶園）の経営者が陶芸教室をそこでやろうとして20年前に設置したものであった。ここで、8年前からカフェを始めたが、現在のようなユニークなカフェギャラリーにしたのは、4年前に、井上あや氏が運営を引き継いでからである。

井上あや氏は、東京生まれ東京育ち。大学を出た後、カフェギャラリーや中古車を利用した移動ギャラリーで働いた経験がある。縁あって笠間に住むようになり、ある時、この「貨車」を見て、オーナーにお願いし、ここで働き始めたという。

井上氏にこの事業についてお話を伺った。「私は、個展等の企画が好きで、人集めが好きで、この事業をしています。事業と言っても、企業でもNPOでもありません。この『貨車』を運転できる『車掌』でギャラリー担当の私と、『食堂長』でカフェ担当の人、それにお手伝いや協力してくれる人たちの『集り』です。」「展示販売は、私の心が動くかどうかで決めており、ジャンルも、焼物だけではなく、絵画、詩集、物語、手工芸品など多様です。仕入先は20人位ですが、笠間以外の人が多いです。企画展は、月に1回行い、インターネットやフェイスブックで発信しています。」「ここは、人と人がつながる場所、ここにすれば人に会える場所として、人が集まるようになりました。定年退職した一人ぐらしの男性や、陶芸作家さんなどが口コミで集まるようになり、『ここに来ると仲良くなれる』という評判がたっています。固定客が多く、日立、大子、下館等県内ははじめ、横浜の方からわざわざ車で月に1~2回来られるお客様もおります。雑誌『フィガロ』、『オズマガジン』、『じゃらん』、『るぶ』等に紹介されてからは、フリーのお客さまも増えてきました。」「私の特技は、人と人をつなげることであり、『サロン』としての役割も果たしています。お客様は、男性が多く、おしゃべりしたい人が集まります。私が話を聞いてあげることで『いやし』効果もあるようです。」「私は笠間が大好きで、笠間に人が来るようにしたいと思います。ふらっと入れるカフェで、ここを笠間の観光案内所のようにもしたいのです。」とご自分の考え方を明快に語られた。

さらに、今年から、井上さんは毎週月曜日の夜に「かしゃま学校」という名の勉強会を始めた。13席、最大25人収容可能なこの「貨車」の中で、お客さんの中で特技が際立った人が講師になり、ワンドリンク+会費300円の合計約600円の会費で、夕方、6時から始まる。





カフェギャラリー「かしゃま文化会館」

講義内容は、やきものの歴史に詳しい人による「やきもの史講座」、大学で哲学を勉強していた人による「哲学講座」、デザイン事務所のスタッフによる「デザイン講座」、英会話等、極めてハイレベルな内容である。井上氏は、「自分自身が聞いてみたい、これで客層を広げたい等が目的です。」と笑顔で付け加えられた。「かしゃま文化会館」は、文字通り「カルチャーセンター」機能も付け加えたようだ。

このように、カフェギャラリー「かしゃま文化会館」は、小さいけれども、「産地革新」に不可欠な機能の一端を担っているように感じられる。そして、「ギャラリーロード」には新しい「コミュニティビジネス」も生まれつつあるようだ。

## ■むすび：笠間焼産地における「産地革新」の新展開の可能性

笠間焼産地は、戦後、需要構造の変化によって産地消滅の危機に遭遇して以来、その都度、革新的なリーダーや地方自治体や公的支援機関等による「産地革新」の施策、すなわち、①製品転換、②その質的転換、③市場の転換、④生産方法の転換、⑤経営の転換などの「事業転換」(山崎充「日本の地場産業」)によって発展・進化してきた。

1950年代は、窯業指導所の松原数馬所長を中心に水かめ・すり鉢から民芸品への「製品転換」が準備された。1960年代は、窯業指導所の島田祥太郎所長を中心に民芸品・小物陶器への「製品転換」が図られ、輸出を含めた「販路拡大」が図られた。そして、1970年代には、「作家誘致の諸施設」や「芸術の森公園」の建設が始まり、「作家中心の脱伝統型産地」が形成された。その後、1980・90年代は、「笠間芸術の森公園」内に配置された窯業指導所、笠間工芸の丘、陶芸美術館などの「ハード」とそこで展開される様々な「ソフト」が、多くの作家を呼び込み、産地の規模を急拡大させ

て、「作家中心の芸術文化産地」へと進化させてきた。

しかしながら、バブル崩壊後の長期不況、リーマンショック後の不況、東日本大震災の影響など、陶磁器地場産業産地の中では「元気な産地」とみられる笠間焼産地といえども、産地を取巻く環境は厳しく、「販売力の弱さ」や「ブランド力の低さ」等を改善する必要に迫られてきた。

本稿で取上げてきた「ギャラリーロード」における「ギャラリー」の集積と様々な革新的な取組みは、笠間焼産地の問題点であった「販売力・ブランド力の弱さ」を改善し、上記の「芸術文化産地化」を促す一翼を担ってきたように思われる。また、「ギャラリーロード」における「陶ISM in KASAMA」イベント等に見られる具体的な取組みの中に、「連携」「ネットワーク構築」「コラボレーション」「まちづくり」等、新たな「産地革新」を促すものが多分に見受けられ、笠間焼産地における「産地革新」の新段階への移行の萌しも窺がえる。さらに、こうした「ギャラリーロード」の様々な革新的な営為と軌を一にしながら、最近、笠間焼産地では様々な主体による産地の「構造転換」を促し、「産地革新」につながるような「新たな取組み」も見られるようになった。

1つは、窯業指導所と窯元・作家が「連携」し、「業務用食器勉強会」を開き、「業務用食器」の制作販売に本格的に取組み始めたことである。産地内の業者が「連携」して「業務用食器」の量産化、デザイン、販路開拓などを検討し始め、窯業指導所も一緒にお手伝いをしている。

2つは、笠間焼協同組合に青年部ができ、次世代を担う作家約30人が参加して「販路拡大」や「陶芸家育成」に会員同士の「連携」を生かそうと立ち上がった。

3つは、やきものの魅力を発信する女性の愛好会「陶芸女子」が結成され、笠間焼と益子焼の両産地を紹介するフリーペーパーを制作し、「女性目線」でやきものや産地の魅力を発信しようとする等、積極的に活動している。

4つは、窯業指導所とギャラリーロード商店会が「ヒューマンガイドシステム」という、スマホを利用して観光ガイドをするシステムをソフトウェア会社と「共同開発」している。これは、笠間を知らなかった世界中の人がキーワード検索で笠間の新しい楽しみ方をゲットして笠間にやってくるという画期的なものである。笠間市も補助を検討し始めている。

今後、以上のような「ギャラリーロード」で見られる革新的な「まちづくり」の取組みが引き金となって、地場産業産地である「笠間焼産地」における「産地革

新」が一段と進み、「産地」や「地域」が活性化していくことを期待したい。なお、本稿では「ギャラリーロード」の「まちづくり」の事例から笠間焼産地全体の「産地革新」との関係を見てきたが、作家・窯元サイドへの調査も踏まえた笠間焼産地における「産地革新」の全体像を把握するには至っておらず、これについては他日に期したいと思う。

最後に、本稿作成に際して、ヒヤリングや資料の提供等にご協力いただいた関係者の皆様方に心から御礼を申し上げたい。

#### (参考文献)

- ・熊坂敏彦「地場産業による地域・コミュニティ再生の可能性—茨城県・笠間焼産地を事例として—」『武蔵大学論集』第53巻第2号(2005)
- ・熊坂敏彦「地場産業産地の競争力とイノベーション—笠間焼産地の事例を中心に—」『産業学会研究年報』第21号(2005)
- ・熊坂敏彦「関東二大陶磁器産地の特性比較—笠間焼産地と益子焼産地—」『筑波銀行調査情報』2011年1月号 No.29
- ・熊坂敏彦「茨城における新時代対応型中小企業—経営革新への取り組み事例(その1)—」『筑波銀行調査情報』2013年1月号 No.37
- ・熊坂敏彦「『同時多発型・笠間モデル』—茨城県笠間市における先進的な地域活性化の取り組み—」日本経済研究所「日経研月報」2013年9月号 第423号



【インタビュー】

## 「まちづくり」・「地域活性化」についての基本的な考え方

茨城県笠間市長 山口 伸樹 氏

(プロフィール)

1958年茨城県笠間市生まれ。1977年茨城県立笠間高校卒業。1982年国士舘大学政経学部卒業。1990年茨城県議会議員当選（4期連続）。2006年笠間市長当選。現在2期目。

聞き手・文責：筑波総研株式会社  
主席研究員 熊坂敏彦



私は、「まちづくり」や「地域活性化」の取組みについて調査をして参りましたが、笠間市の取組みは茨城県内はもとより全国的に見ても先進的な施策を多様に展開しておられることから「同時多発型・笠間モデル」としてまとめさせていただきました。

はじめに、山口市長の「まちづくり」や「地域活性化」についての基本的な考え方をお教えてください。

第1は、「コンパクトなまちづくり」をめざしています。少子高齢化、人口減少社会に対応するために、笠間、友部、岩間の3地区ともに、公共施設が郊外にばらばらと配置されている現状を改め、一定の地域に集約化してコンパクトなまちを作りたいと考えています。中心市街地を形成し、そこから渦巻状にまちを拡げていきたいです。震災復旧復興後のまちづくりとして「駅周辺整備活性化プラン」が今年から始まりました。地域の活性化のために、公共用地を使って地域コミュニティ施設づくりを推進する方針です。

また、笠間にはJRの駅が6つ（福原、稲田、笠間、宍戸、岩間、友部）もありますが、駅を中心としたまちづくりを推進したいと思います。これからの時代は、公共交通として鉄道が再評価されるべきであり、商業や観光とも密接に関係しています。そうした中で、駅は地域の中心的な存在であります。まずは、駅周辺に未利用公共用地がある友部駅、岩間駅、稲田駅の周辺開発などを計画しています。

第2は、「笠間にしかないもの」をPRしながら、「交

流人口」の増加を図ることを重要視しています。市町村間の「都市間競争」が激しくなっている中で、笠間市をどうアピールし、売り込むかが重要となっています。笠間市の取組みを市民だけではなく、県内外に積極的に情報発信して注目していただき、笠間市に来ていただくことが重要であります。そのためには、他と同じではなく、「笠間にしかないもの」をアピールする必要があります。たとえば、「笠間焼」、笠間稲荷神社等歴史的な建造物、栗や菊等の農産物、スポーツとしては「合気道」などがあります。特に、「笠間が発祥地であるもの」をPRすることで「地域活性化」につなげたいと思います。

第3は、「地域活性化」の「主役」はあくまで「市民」であり、役所は「後押し」をするところだということです。地域活性化や中心市街地活性化で成功している事例は、いずれも地元の市民・住民や商店街が意欲を持って取組んでいるところです。長浜市の黒壁スクエア、高松市丸亀町、川崎市等やB1グランプリで有名なところは、地元住民や商店街が主体的に取組み、役所は後押し役に徹しています。B級グルメ、愛Bリーグへの参加の取組みも県内では笠間市が一番早く取組んでいます。食を通じたまちおこしとして期待しています。ここでも、市民が中心に取組んでおり、役所の職員も一市民として積極的に参加しています。役所は、後押し役として、PR、広報、会場設定等を担っています。

笠間市で「同時多発」的に展開されている「地域活性化策」について、民間を主体として「官民連携」で推進するという山口市長のお考えや施策をもう少し具体的に伺えますか。

第1は、農業振興策についてですが、TPP問題や人口減少社会の中でどう生き残っていけるか、今のままでは縮小してしまうという危機感を持っています。そのために、農家の方に危機感を持って自助努力をしていただき、役所はそのお手伝いをしたいと思います。このような意を受けて、笠間市には農業の「6次産業化」を推進するために「アグリビジネスネットワーク協議会」が設立され、生産者、販売者、加工業者等42もの業種が参加しました。また、「笠間市農業公社」の立上げも考えています。日本一の粟の産地としてさらに高品質の粟を耕作放棄地につくれないか、中山間地域の土地利用策とならないか、をまずは役所で検討を開始しました。農業公社を立ち上げ、軌道に乗ったら、運営は民間に任せたいと考えています。

第2は、商店街の活性化策ですが、地元の商店街の一部に危機意識を持ちながら主体的な動きが見られるようになり、役所も支援に動いています。古くからの商店街である笠間稲荷門前通り商店街では、通りの人たちが危機感を持って「かさまち考」という活性化事業に取組み始め、役所も連携して整備事業を推進中です。新しい商店街であるギャラリーロード商店会では、若い世代が、意欲的にまちづくりに取組んでおり、茨城県商店会活性化コンペ事業で最優秀賞を受賞しました。その熱意を感じて市も歩道の拡幅などのインフラ整備事業を今年度からスタートさせています。また、農村部では高齢化による「買い物弱者」が増えており、これらの対策も必要です。ここでも、野菜、果物、魚などを軽トラックで移動販売や宅配などを民間で、できれば商店会の人たちに取組んでいただきたいと思っています。市もバックアップを考えます。



第3は、観光振興策についてですが、市が観光協会とタイアップして旅行商品を開発販売し、「着地型観光事業」を行って大きな成果をおさめています。観光政策の立案は市が行っていますが、実務面では民間の旅行会社から専門職を受入れて、民間の力を活用しております。笠間稲荷神社や日動美術館など従来からの観光に加えて、笠間焼や稲田石の体験ツアー、酒蔵ツアーなど、観光による地域産業振興も図っています。

なお、民間部門の人材活用は、市立病院の事務局長や第三セクターの経営者などにも適用し、成果をあげています。

そうした数多くの先進的な施策は、いかにして生み出され、施策として具体化されているのでしょうか。山口市長の「地域活性化」の手法、極意がございましたら教えてください。

特別な手法があるわけではありませんが、私は情報の感度を高めようと常日頃意識しており、アンテナの感度を高めるように努力しております。全国の先進的な取組み、特に民間の先進的な取組みから学ぶことが多く、笠間でそれができないか、自分で考え、職員に投げかけ、新しい取組みを促してきました。それらの情報源は、主に新聞です。毎朝、自宅で40～50分、6～7紙に目を通して多くのヒントを得ています。また、有識者や専門家のセミナーなどに参加し、話を聞いています。外部に出向させた職員や外部から市に出向している職員、笠間ファン倶楽部のメンバーなどからも有益な情報をいただいております。

「地域ポイント制度」も、民間で利用されているポイント制度を行政で利用・応用できないか考えていたところに、団塊の世代の人たちが退職して地域活動に参加する際に「後押し」をする材料が必要で、それに利用できることを思いついたことから始まったものです。

山口市長には、私も発起人の一人である「笠間ファン倶楽部・東京支部」の会合にも積極的に出ていただき、交流を深めていただいております。今後、さらに「笠間ファン」をさらに広げて行く上で、「都市農村交流」も重要と思われませんが、山口市長のお考えをお聞かせください。

総務省が管轄する「地域おこし協力隊」事業を、県内では2番目に始めました。陶芸作家になりたい人や笠間で農業をしたい人などを募って、将来、笠間に定住させることを目的にしています。「交流人口」の拡大





とともに、若い人たちに「定住」していただくことが重要であります。

「都市農村交流」という面では、都会の子供たちに笠間に来ていただいて田舎の良さを味わっていただくとともに、笠間の子供たちを都会に送り込んで都会にしかないものを体験してもらうことも必要だと感じております。

また、「国際交流」も大事なことと考えております。笠間では、クールシュヴェール国際音楽祭などが開かれており、ドイツやクウェート・レバノンなどとの交流もあります。さらに、2020年の東京オリンピックは、「国際交流」の夢を拡げてくれます。笠間は東京に近く、95カ国で修業されている合気道、日動美術館、日本最古の酒蔵である須藤本家など、笠間には世界に誇れるものが数多くあります。オリンピック開催の前年には「茨城国体」が開催予定であり、スポーツの振興を図ることはもちろんですが、プレオリンピック、合宿、国際試合などで笠間で何ができるか、何を世界に向かってPRできるかが、この1～2年の課題だと思っています。

さらに、地方自治体の「国際化」を図る上で、人的な交流が必要であると思います。新興国やアジアからの行政研修生の受け入れと職員の海外研修が重要で、そうしたことから良い人材が採用できればおのずと行政のレベルも向上すると思っております。

「都市農村交流」から「国際交流」「グローバル化」に至るまで、貴重なお話をお聞かせいただきました。最後に、山口市長のこれからの「夢」をお聞かせください。

時間があれば、硫黄島に行って遺骨収集をやりたいです。それから、八丈島に小さな家を建て一日中魚釣りをして暮らしてみたいですね。

今日、山口市長からお伺いいたしました数多くの現実的な「夢」に比べますと、八丈島の楽園生活の「夢」は当分かなえられそうもない「夢」のようですね。

本日は、お忙しい中貴重なお時間を割いていただきましてありがとうございました。笠間市のますますのご発展をご期待申し上げます。

(平成25年9月10日)

ご参考

「産業レポート」のバックナンバー

調査情報誌	産業レポート
関東つくば銀行 調査情報 2009年10月号 No.24	茨城県における「農商工連携」の可能性について 和郷園にみる革新的農業経営
関東つくば銀行 調査情報 2010年1月号 No.25	茨城マグネシウムプロジェクトの成果と今後の課題 新たな地場産業の生成：ひたちなか地区のほしいも産業
筑波銀行 調査情報 2010年4月号 No.26	茨城らしい観光振興への取り組み —笠間市の地域密着型ニューツーリズム— ローカルエネルギーシステム再考
筑波銀行 調査情報 2010年6月号 No.27	つくば発ベンチャー企業の現状と課題 茨城県内の元気な商店街とその成功要因 —つくば市北条商店街と常陸太田市鯨ヶ丘商店街の事例—
筑波銀行 調査情報 2010年9月号 No.28	茨城県の石材地場産業の現状と課題 山形カロッツェリア研究会にみる地場産業産地の革新
筑波銀行 調査情報 2011年1月号 No.29	関東二大陶磁器産地の特性比較 —笠間焼産地と益子焼産地— 茨城県内企業の中国進出の現状と課題 —上海進出企業向けアンケート調査を中心に—
筑波銀行 調査情報 2011年3月号 No.30	結城紬産地の現状と課題
筑波銀行 調査情報 2011年7月号 No.31	東日本大震災の特徴と復興に向けて —茨城県との係りを中心に— つくば発グリーンイノベーション —微細藻類エネルギー革命—
筑波銀行 調査情報 2011年10月号 No.32	茨城農業の特徴と革新への取組
筑波銀行 調査情報 2012年1月号 No.33	茨城・栃木における地域ブランド力向上に向けた取り組み
筑波銀行 調査情報 2012年4月号 No.34	清酒製造業の現況と老舗企業の革新への取組み—茨城・栃木両県を中心に—
筑波銀行 調査情報 2012年7月号 No.35	日立・ひたちなか地域の「ものづくり」中小企業の特徴とサバイバル戦略の方向性 東日本大震災被災地における新たな「まちづくり」の息吹き —宮城県南三陸町の事例を中心に—
筑波銀行 調査情報 2012年10月号 No.36	再生可能エネルギーの可能性と利用拡大に向けた取り組み —茨城県における取組み事例を中心に—
筑波銀行 調査情報 2013年1月号 No.37	茨城における新時代対応型中小企業 —経営革新への取組み事例（その1）—
筑波銀行 調査情報 2013年4月号 No.38	首都圏近郊の賑わいある「まちづくり」の取組み —柏市における「まちづくり」の特徴と仕掛け人たち—
筑波総研 調査情報 2013年7月号 No.39	地方自治体における「地域ポイント制度」の新展開

## 調査情報 No.40

2013年10月 発行

発行 筑波総研株式会社

〒305-0032

茨城県つくば市竹園1丁目7番

電話 029 (829) 7560